論　説

通底と乖離（かい）——国語辞書に見る日・中の異同（2）

夏　　剛

「洶湧→凶猛・勇猛」と「狂乱・狂舞 / 乱舞」

中国語の「瀾」（lán）と「乱」（luàn）は発音の違いで混用できず，日本語の「波瀾」の書き換えの「波乱」は『漢大』にも無い。他方，天安門事件（1989.6.4）の民主化運動に対する武力鎮圧の「反革命暴乱」の断罪と，後に当局が口調（トーン）を落した「政治風波」の言い種（ぐさ）とは，両言語共通の漢字の妙で「波乱」に合成できる。『現漢』の bō の部で【拨（撥）】【波】が最初に出ており，「撥乱」に関する考察は「波瀾」を介在して同音の「波乱」と繋がる。

漢字の合成・派生は「光芒・気焔→光焔」の様な字の組み合せの他，「洶湧」の右半分＋「猛」の「凶猛・勇猛」の共通項の結合も有る。両言語共有・同義の両「猛」語の前者の「凶」と「乱」を繋ぐと，『日国』で該当の【凶乱・兇乱】（「〈名〉凶悪な反乱。ひどい世の乱れ」。初出＝「兵範記－仁安三年［1168］」，漢籍典拠＝「蜀志－秦宓伝」）が見当る。由緒有る言葉ながら『広辞苑』にも『現漢』にも出ないが，次の【狂乱】【狂瀾】は日・中共通の部分が多い。

日本語の「狂乱」の両義（『広辞苑』＝「①心が狂い乱れて常態を失うこと。比喩的に，きわめて異常なこと。“―物価”②歌舞伎で，狂人の狂い舞う所作」）は，漢籍由来（『日国』の「〈名〉1［―する］正気を失い乱れて常態を失うこと。また，その状態。狂惑」の典拠は「論衡－効力」）＋和製（「2“きょうらんもの”［狂乱物］に同じ」の当該項目は「〈名〉能，狂言や歌舞伎舞踊の中で狂乱の所作を主題にした作品。［下略］」）であるが，その多義・多用に対して『現漢』の数多い「乱」語に入らない。

両義の「乱・舞」が合成する単語（「〈名〉1入り乱れて踊りまわること。酒宴の席などで，楽器にあわせて歌い踊ること。らっぷ。［下略］2能で速度の速い舞。3能のこと。また，その一節を謡い奏して舞うこと。らっふ。4［①のような様子を呈することから］花がしきりに散ること，蝶がもつれ合って飛ぶこと。人が喜んだり興奮したりして跳び回ることなどをいう」）は，漢籍（1の典拠＝「梁簡文帝－筝賦“鴛鴦七十二，乱舞未レ成レ行”」）由来から和製の専門用語・比喩が生れた。

『広辞苑』の語釈（「［ラップとも］①踊り狂うこと。入り乱れて舞うこと。②五節（ごせ）・豊明節会

とよのあかりのせちえなどの後に，殿上人などが余興として演じた世俗的な舞。③能の舞。狭義には仕舞 ”」）の①②に出典各１点，①に用例（「狂喜―」）が付く。【狂喜】（「常軌を逸するほど喜ぶこと。非常に喜ぶこと。“―乱舞 ”」）にも出る４字熟語は，中国発（『日国』＝「〖名〗ひどく喜ぶこと」，漢典＝「紅楼夢－三七回」，初出＝「経国美談［1883－84］〈矢野龍渓〉」）の単語から派生した。

『現漢』の同項（「形極端高興：他們見面時～地擁抱在一起」［形最高に喜ぶ。「彼等は会う時に有頂天と為って抱き合った」］）も，日本語の「狂気」（『広辞苑』＝「常軌を逸していること。また，そのような心。“―の沙汰 ”」。『日国』＝「〖名〗気が狂うこと。また，常軌を逸した心」）程の非常識でない事を示す。漢典（「韓愈－酬司門盧四兄詩」）が挙げられた「狂気」は中国語で，放恣・不羈の気概から傲慢・生意気（『現漢』＝「形狂妄自傲的様子」［形傲り昂っている様の形容］）を表すに至った。

『現漢』の【狂喜】の語釈中の「擁抱」（「動為表示親近和愛意而互相摟抱」［動親近と愛の意思を表す為に抱き合う］。『漢大』の語釈＝「抱持」［抱き抱える］，初出＝《宋史・燕懿王徳昭伝》）は，日本語で「抱擁」（『広辞苑』＝「だきかかえること。抱き合って愛撫すること。“帰ってきた息子を―する ”」。『日国』＝「〖名〗だきかかえること。だきかかえて，挨拶または愛撫すること」，初出＝「花柳春話［1878－79］〈織田純一郎訳〉」）と言う。

『漢大』の【抱擁】（語釈＝「擁抱」）の初出（「清葆光子《物妖志・獺》」）は和製漢語より遅く（1910），次の例（「郭沫若《落葉・第十五信》」）の作者（1892～1978，文学者・学者・政治家）は，長い日本留学の影響も有って和風漢単語を愛用したが，両言語の反転・逆様を現す様に，中国語の「抱擁」は『現漢』不採録の通り定着せず，『宋史』（宋代の正史，元［1271～1368］の脱脱［托克托，1314～56，権臣］等勅撰，45年成立）所載の「擁抱」は遂に日本語に入らなかった。

「乱舞」は狂人の狂い舞う所作や狂言等で狂乱の所作を主題にした作品の意も有るが，この和製漢語の創作者は「狂舞」の着想を持ち合せなかった。吉川英治（1892～1962，小説家）は『大岡越前』（長篇，50）で「心炎狂舞」の造語を使ったが，『日国』には「心炎」も「狂舞」も入らない。対して『現漢』の【狂】❸（「縱情地、無拘束地〈多指歡楽〉」［心行くまで，自由奔放に〈多く歓喜を指す〉］）で，用例の「～喜｜～歓｜～舞」（「狂喜」「思う存分楽しむ」「乱舞」）に出る。

【狂歓】（「動縱情歡楽：～節」［動思う存分楽しむ。「謝肉祭」］）は，『日国』にも有る（「〖名〗非常に喜ぶこと。大喜びすること」，出典＝「風前雨後［1954］〈中野好夫〉」）が，『広辞苑』では採録してない。中国語の「狂舞」は「金蛇狂舞」（聶耳［1912～35，作曲家］編曲）で知られるが，「金蛇」も『日国』に保存してある（俱に漢籍由来の「〖名〗1金色のヘビ。2火や光などが長くうねうねと照ること。いなずまなどをたとえていう」）ものの，『広辞苑』の実質的な退役語彙にも無い。

唐（618～907）の「詩聖」杜甫（712～70）は官軍が河南・河北の失地を奪還したと聞いて，「却看妻子愁何在，漫巻詩書喜欲狂」（妻子を却り看て愁い何くにか在る，漫りに詩書を巻き喜んで狂せんと欲す）と詠んだ。歓喜が爆発し驚喜が極まり狂喜が昂じても狂気・乱心には至らないが，「乱舞」ならぬ「狂舞」を使う中国人は，「凶忌」（和製漢語，『日国』＝「〖名〗［形動］

不吉で忌むべきこと。また，そのさま」。『広辞苑』『現漢』不採録）を嫌う心理が強い。

「廻狂瀾於既倒」と「力挽狂瀾」

日本語の「狂瀾」（『広辞苑』＝「①荒れ狂う大波。②狂い乱れて手のつけようがない情勢」。『日国』＝「〈名〉1荒れ狂う波。狂ったようにさかまく大波。狂濤［きょうとう］。2物事の狂い乱れる状態をたとえていう語」，2に「丁復－送客詩」の漢典有り）は，中国語（『現漢』＝「名巨大的波浪，比喩動蕩不定的局勢或猛烈的潮流：力挽～」［名巨大な波浪。揺れ動いて不安定な局面或いは猛烈な潮流の比喩。「極力危険な状況を挽回する」］）と全く同じである。

『広辞苑』の【狂瀾を既倒に廻らす】（「韓愈，進学解］荒れ狂う大波を押し返す。時勢がどうしようもなく傾いたのを再びもとに回復することにいう」）に対し，『日国』の【きょうらん を既倒（きとう）に＝廻（めぐ）らす［＝反〈かえ〉す］】（「［韓愈の『進学解』の“障二百川一而東レ之，廻二狂瀾於既倒一”による］倒れかけた荒れ狂う大波を来た方向へ押し返す意から］傾きかけた形勢をふたたびもとの状態へひきもどすことのたとえにいう。回瀾［かいらん］を既倒に反す」）と為る。

「既倒」（『広辞苑』＝「すでにたおれたこと。→狂瀾を既倒に廻らす」。『日国』＝「〈名〉すでにたおれている。→きょうらん［狂瀾］を既倒に廻らす」，初出＝「ロシアに入る［1924］〈荒畑寒村〉露都で見聞した人・一“トロツキーの決死的努力に依て，辛ふじて頽瀾を既倒に挽らすを得た”」，漢典無し）は，成句と共に単独立項の無い『現漢』に於いて，【挽】❷（「扭転；挽回：～救｜～狂瀾於既倒」［物事を好い方向に転換させる。挽回する。「危機を救う」「狂瀾を既倒に廻らす」］）に見える。

韓愈は唐宋八大家（『日国』＝「中国，唐代および宋代の八人の散文作家の総称。すなわち唐の韓愈［かんゆ］・柳宗元，宋の欧陽脩・蘇洵［そじゅん］・蘇軾・蘇轍・曾鞏［そうきょう］・王安石をいう」）の筆頭であるが，『広辞苑』の【唐宋八家】（「中国の唐・宋時代の八人の著名な古文家。［中略］その文章を明の茅坤が『唐宋八大家文鈔』［一六四巻］として編纂，『唐宋八家文読本』はその抜粋。唐宋八大家」）の見出し語は中国で異称と為る。

『日国』の次の【唐宋八家文読本】（「中国の総集。三〇巻。清の沈徳潜撰。乾隆四年［一七三九］成立。唐宋八大家の模範となる文章を集め，評点・段落を付したもの。明の茅坤［ぼうこん］の『唐宋八大家文鈔』一六四巻，清の儲欣［ちょきん］の『唐宋十大家全集録［『唐宋十家文』とも］』五一巻に基づく選本。日本には江戸中期以後に伝来，文化一一年［一八一四］昌平黌［しょうへいこう］で官板に付されてから教科書として流布した」）の通り，唐宋八大家の名作は曾て両国で文章の典範を為した。

日本流の通称と違う「八大家」は「大」を尊ぶ国民性の現れでもあるが，「狂瀾を既倒に廻らす」「光燄万丈長し」「狂気」等の漢籍典拠で引かれた韓愈は，同音（Hanyu）の「漢語」（中国語）及び日本語への貢献が大きい。彼の生誕（768）600周年に終焉した元代に，「廻狂瀾於既倒」から中世～現代の「力挽狂瀾（倒）」が生れた（初出は王惲［1227～1304，政治家・

文学者］の詩『挽李子陽・二首之二』の「筆端力挽狂瀾倒，袖里親携太華来」)。

韓愈の逝去（824）1 100 周年に出た荒畑寒村（1887～1981, 社会主義者）の「既倒」の用例は，「努力」「頽瀾を既倒に挽らす」に「力挽狂瀾倒」の 8 割の字を含める。「頽瀾」（『広辞苑』＝「波頭のくずれおちようとする波」。『日国』＝「〖名〗くずれおちようとする大波」，出典は【既倒】に同じ，漢典未記載）は，『漢大』には出ないが，中国の古語として歴史が長い（宋の熊則軒［生歿年未詳］の詞［長短不揃いの定型詩］『満庭芳・郭県尹美任』の冒頭に，「波有頽瀾」と有る）。

「廻 / 挽」は音（中国語＝ huí，wǎn）・意とも違うが，2 字の合成は「挽回」（『広辞苑』＝「もとへもどしかえすこと。とりかえすこと。回復。“名誉を―する”」。『日国』＝「〖名〗失ったものや遅れていたものを取りもどすこと。とりかえすこと。回復」。『現漢』＝「動❶扭転已成的不利局面：～面子｜～影響｜～敗局。❷収回：～利権｜～経済損失」［動❶既成の不利な局面を転換させる。「面子を取り戻す」「悪影響を打ち消す」「敗局を挽回する」❷回収する。「利権を回収する」「経済的損失を取り戻す」］）に為る。

『日国』の初出（「峨眉鴉臭集［1415 頃］）は『漢大』所載（「宋蘇軾《浣渓沙・即事》詞」）より遅く，原語に忠実な「狂瀾を既倒に廻らす」（同＝「常山文集［1718］」）と共に「廻・回」を活用した。「めぐら・す【廻・巡・回】」（「〖他サ五［四］〗［“めぐる”の他動詞形。“めぐらかす”とも］」）の②（「くるりとまわす。回転させる。旋回させる」）は，『現漢』の【回（迴・廻・迴・回・囘）】❸（「動掉転：～頭｜～過身来」［動反対方向に向きを変える。「振り向く」「体の向きを変える」］）に当る。

「廻狂瀾」の代りに中国で定着した「挽狂瀾」の「挽」は，『日国』の「ばん〖字音語素〗3 免の類」中の【挽】㊀の両義（「①力をいれて引く。“輓”に同じ。/ 挽回 / ②ひつぎの車を引く。人の死をいたむ。/ 挽歌，挽詩 /」）とも中国語に由来した（其々『現漢』の【挽】の❷［前掲］と❺（「哀悼死者：～歌｜～聯」［死者を哀悼する。「挽歌」「死者を悼む対聯」］）。この字を用いる両言語の単語は同形・同義も一定数有るが，共有しない又は意味が懸け離れた場合も多い。

「挽回」「挽歌」と「弓を挽く」「材木を挽く」

『全訳 漢辞海』（以下『漢辞』）第 4 版（佐藤進・濱口富士雄編，三省堂，2017）の【挽】は，多様の発音（「バン㊇ ベン㊇ メン㊀」・語義（「〓《動》❶ひ - く。㋐弓をひく。例挽レ弓当挽レ強ゆみヲひかバまさニつよキヲひクベシ 訳弓をひくならば強弓をひくべきである〈杜甫－詩・前出塞〉㋑車などをひっぱる。通輓バン。例挽レ舟浚レ河ふねヲひキテかヲさらウ 訳舟をひっぱり河底をさらう〈蘇軾・祈雨祝文〉」❷状況を好転させる。現状回復させる。ひきもどす。“挽救ばんキュウ”❸哀悼する。死者をいたむ。通輓。“挽詞”❹まきあげる。まく。“挽袖ばんジュウ”」）を示す。

❶の㋐㋑は『現漢』の❶（「動拉：～弓｜手～着手◇～留」［動引く。「弓を引く」「手に手を取る」「〈比喩的に〉引き留める。慰留する」］），❹（「牽引［車輌］：～車」［車輌を］牽引する。「車を曳く」）と通じ，❹は❸（「動向上巻［衣服］：～起袖子」［動［服を］巻き上げる］［袖を巻き上げる］）と一緒であるが，例示の「挽救」（『現漢』＝「動従危険中救回来：～病人的生命｜～失足青年」［動危険

な状況から救い出す。「患者の生命を救う」「非行青年を救う」]）や「挽舟」「挽袖」は日本語には無い。

『漢辞』の単語項は【挽歌】（「葬儀で，死者を弔うために歌う歌。［世説・任誕］」），【挽回】（「もとにひきもどす。［蘇軾・詞・即事］」），【挽郎】（「葬儀で棺を引き挽歌を歌う人。［世説・紕漏］」）が有る。「挽回」は唐宋八大家中の蘇洵の長男・蘇轍の兄の詞で使われたが，『日国』新版の同項所載の第11巻（2002.11.20）は『漢辞』初版（00.1.10）の後に出たのに，類書の示唆で漢籍典拠を追求する事も無く和製漢語として誤記された。

【挽歌・輓歌】（「〖名〗1［“挽”は“柩〈ひつぎ〉をひく”の意］葬送のとき，柩を載せた車をひく者のうたう歌。2人の死をいたむ詩歌。哀悼の意を表わす詩歌。3［挽歌］『万葉集』で，歌を内容から分類した名称の一つ。雑歌・相聞とともに三大部立の一つ。中国の詩，特に『文選』の挽歌詩の影響を受けたもの。この類には辞世や人の死，また伝説中の人物に関するものなどを含んでいる。平安時代以降の歌集では“哀傷”の部にあたる」）から，漢籍（1の「晉書－礼志中」）由来＋和製語義の生成が窺える。

『広辞苑』の【挽歌】（「①中国で，葬送の際，柩車を挽く者がうたった歌。②死者を哀悼する詩歌。悼歌。哀傷歌。万葉集では相聞・雑歌とともに部立の基本」）に対し，『現漢』（「名哀悼死者的歌」［名死者を哀悼する歌］）は簡単である。【挽詞】（「名哀悼死者的言辞，特指写在挽聯上的。也作挽詞」［名死者を哀悼する言辞。特に死者を哀悼する対聯に書く物を指す。“挽辞”にも作る］）は詳しく，【挽辞】の項も有る（「同“挽詞”」）が，「挽聯」（「名哀悼死者的対聯」）と共に日本語に無い。

「挽詩」（『広辞苑』＝「［“挽”は柩車を引く意］死者をいたみとむらう詩。哀悼の詩」。『日国』の【挽詩・輓詩】＝「〖名〗死者を悼む詩。哀悼の詩」，初出＝「空華集［1359－68頃］」）は，『現漢』で選に漏れたが『漢大』には有る（「哀悼死者的詩」，初出＝「清方文《述哀》詩」）。『日国』の漢典未記載は清（1644～1911）の前に出た和製漢語の為であろうが，趙翼（1727～1814，学者）が言う「挽詩盛於唐」（挽詩は唐に於いて盛んなり）の通り，千年前に中国で多く作られていた史実が有る。

「力挽狂瀾倒」の出典『挽李子陽』（李子陽を挽む）は題の通り挽詩に他ならず，関連の「挽詞／辞」も『漢大』（語釈＝「哀悼死者的詞章」［死者を哀悼する詩文］）の初出（「『新唐書・承天皇帝倹伝』」）で分る様に歴史が古い。【挽歌】（「挽柩者所唱哀悼死者的歌。後泛指対死者悼念的詩歌或哀嘆旧事物滅亡的文辞」［柩車を挽く者が歌う，死者を悼む歌。後に一般に死者を偲ぶ，又は旧い物事の滅亡を哀嘆する文辞を指す］）も，用例5点の半分以上が『日国』の2より早い。

『漢大』の【挽詞】の次の【挽強】（「謂拉引硬弓」［強弓を挽く事を謂う］）は，中国では死語化し日本語には入らなかったが，初出（「唐杜甫《前出塞》詩之六：“挽弓當挽強，用箭當用長。」）は名作として知られる。10字を嵌めた和訳の「弓を挽かば正に強きを挽くべし，箭を用いなば正に長きを用うべし」に対し，『広辞苑』『日国』の【弓を引く】に「挽」の併記が無く，前者の「ひ・く【挽く・碾く・弾く・轢く】も「〖他五〗→ひく（引）❾❿⓫⓬」に帰す。

【引く・退く】〖自五〗の次の【引く・曳く・牽く】〖他五〗の❾（「［“挽く”と書く］①［鋸を手前に引く意から］切り割る。②回転する工具で材料を削る。宇津保吹上上“沈を一尺二寸ばかりのから

わに轆轤に―・きて ”」）は，『漢辞』の【挽】に記す日本語用法（「ひ - く。①刃物で切ったり削ったりする。木挽(こびき)。②うすなどで粉にする。“ 茶を挽く ”」）に当る。牽引の意が強く人・車に対して使う中国語の見地から，「引・曳・牽」と並ばない見出し語中の非表示以上に違和感が有る。

『角川大字源』（尾崎雄二・都留春雄・西岡弘・山田勝美・山田俊雄編，角川書店，1992。以下『角源』）の【挽】には，字義（「①ひく。ひっぱる。〔杜甫・前出塞詩 “ 挽レ弓当レ挽レ強 ”〕㊐輓(ばん)②死者を弔う。“ 挽歌 ”③まく。まきあげる。からげる。〔蘇軾・送二周朝議守一漢州一詩〕“ 挽レ袖謝二隣一里 ”」/ 和ひく。動詞 “ ひく ” の転義に当てる。“ 材木を挽く ”“ 挽き物の盆 ”“ 木挽(こびき) ”」），解字（「形声。意符の手［て］と，音符の免(べン)→(バン)［力を入れて引っ張る意＝輓(バン)］とから成る。手で強く “ ひく ” 意」）と有る。

【挽歌】（「①葬式のとき，ひつぎを乗せた車を引く者がうたう歌。弔いの歌。〔古今注・音楽〕“ 使二挽レ柩車者歌一之，世呼為二挽歌一 ”〔万葉二・一四五左注〕②死者を悲しみ悼む歌。《㊐輓歌(ばんか)」），【挽回】（「もとに引き戻す」），【挽強】（「強い弓を引く。挽満。〔老学庵筆記五〕“ 以二挽強一名二於秦隴間一 ”」），【挽牽】（「ひっぱる。〔唐・安禄山伝〕」），【挽満】（「挽強に同じ。〔後漢・梁冀伝〕」）は，「挽歌」を和製とし「挽回」の由来を示さない半面，辛(かろ)うじて『漢大』に残る「挽強」「挽満」に光を当てた。

『日国』の「ひ・く【引・退・曳・牽・惹・弾・挽・碾・轢】」の■〖他カ五（四）〗の内，「挽く」は五（「物を前後または左右に動かす」）の2（「［挽］刃物を動かして切ったり削ったりする。また，ろくろがんなで工作する。刻む」，初出＝「宇津保［970－999 頃］」）に出る。『漢辞』で並列された3（「［“ 碾 ” とも］穀物・茶や肉などをひきうすなどで磨り砕く」，初出＝「御湯殿上日記－明応三年［1494］」）と共に，「職人国家」「物作(づく)り大国」の得意技の細工が語義と為る。

『現漢』の【挽（輓）】で同一化した車偏の方は，『日国』の「ばん〖字音語素〗」で【挽】【晩】の次に出る（「㊔①車や舟をひく。また，人をひきあげて用いる。“ 挽 ” に同じ。/ 推輓 / 輓輪 / 輓馬 / ②ひつぎの車を引く。人の死をいたむ。“ 挽 ” に同じ。/ 輓歌 /［③略］」）。『漢辞』の【輓】の語義「■〖動〗通挽(バン)」（❶〔車両を〕前方にひっぱる。ひ - く。例或輓之，或推之(あるイハこれヲひキ．あるイハこれヲおス)．訳［二人の］一方はひっぱり，一方は押す［左・襄一四］❷哀悼する。死者をいたむ」）は，人の引き・推しを特筆する。

単語 5 項中の【輓輪】（「車や舟で物資を運ぶ［漢・韓安国伝］」）は「商人国家」の物流を思わせ，【輓推】（「①前後から引いたり押したりする。［左・襄一四］②推薦する」）は「挽・推」の両面を示す。何れも和語「挽く」と対極的な強引さが必要な事柄であるが，日本語の「押す・圧す・推す」と「雄・牡」の同音に引っ掛けて言えば，「挽」と「挽く」の意味の違いから両言語の押し（自己主張）の強弱の差が感じられる。

「怒濤・驚涛」と「巨濤・巨浪」

『日国』の【頽瀾】の上段の【大瀾】（「〖名〗大きな波。大波」）は『漢大』に無い和製漢語で，『広辞苑』にも入らない。初出（「帰省［1890］〈宮崎湖処子〉」）で対を為す「怒濤」の熟語に，

「狂瀾怒涛」（「〖名〗いかり狂ったようにさかまく荒波。転じて，荒れ狂ったように物事の秩序のひどく乱れているさまをたとえていう語」）と有るが，中国語には類義の「驚風怒涛」（『漢大』＝「喩生活中的艱難険悪」［生活の中の艱難・険悪の喩え］，初出＝「清劉大櫆《謝氏妹六十寿序》」）しか無い。

1点目の用例（「明治廿三年後の政治家の資格を論ず［1884］〈徳富蘆花〉」）は，【波瀾万丈】【悔悟】等でも初出に挙げられた小説家（1868～1927）の表現である。『広辞苑』の項（「荒れ狂う波のように，ひどく乱れているさま。秩序の乱れた社会や，大きな変動のたとえに使う。“―の時代”」）は，中性的な大変動の意味を添えている。『現漢』の語釈・用例（「〖名〗汹湧的波涛：～拍岸」「〖名〗逆巻く波涛。怒涛が岸を拍つ」）は，比喩の意味も攪乱の語感も稍薄い。

逆に【怒潮】（「〖名〗❶汹湧澎湃的浪潮，比喩声勢浩大的反抗運動。❷涌潮」［〖名〗❶奔流澎湃の潮，威勢の凄い反抗運動の比喩。❷涌く潮］）の比喩的な語義は，日本語（『広辞苑』＝「怒り狂ううしお。激しい潮流」。『日国』＝「〖名〗さかまく潮。波頭を白く泡立たせて激しく寄せる潮」，初出＝「艸山集［1674］，漢典＝「蘇舜欽－詩僧則暉，求詩」）には無い。枚挙に暇が無い両言語の同義語の異形や同形語の異義は，中国語で「錯位」（位置がずれる）とも言うこの食い違いに再び現れる。

『現漢』の【怒涛】の用例に有る「拍岸」は，【拍】❶（「〖動〗用手掌或片状物打：～球｜～手｜～掉身上的土◇驚涛～岸」［〖動〗❶掌或いは片状の物で敲く。「球を敲く」「拍手する」「体に付いた土を叩き落す」「［比喩的に］［怒涛が岸を拍つ］」）に出る。蘇軾の詞『念奴嬌・赤壁懐古』の「驚涛拍岸，卷起千堆雪」（驚涛岸を拍ち，巻き起す千堆の雪）から取った例は，教養人が好んで引き合いに出す古典文学の名句の不朽の影響力を物語る。

【驚涛駭浪】（「❶凶猛而使人害怕的波涛：船在～中前進。❷比喩険悪的環境或遭遇」［❶凶猛で人を恐れさせる波涛。「船が狂涛の中を進む」❷険悪な環境或いは遭遇の比喩］）を構成する2語は，「驚涛」は日本の辞書に見当らず，「駭浪」は『日国』にしか無い（「〖名〗湧き立ち荒れて恐ろしい波」，初出＝「宝覚真空禅師録［1346］」，漢典＝「王粲－浮淮賦」）。「驚涛～浪」「～人聴聞」（聞く人を驚かす）を例示した【駭】（「驚吓；震驚」［驚き恐れる。驚かす］）も，日本語で使わなくなった。

日本語で「驚涛」と同音の「狂濤」（『広辞苑』＝「荒れ狂う大波」。『日国』＝「〖名〗荒れ狂う波。狂いたつ大波。怒濤。狂瀾（きょうらん）」，初出＝「広益熟字典［1874］〈湯浅忠良〉」，漢典＝「一斉己－観李瓊処士画海濤詩」）は，当然ながら『現漢』にも有る（「〖名〗汹湧的波涛，比喩浩大的声勢」［〖名〗逆巻く波涛，盛大な威勢の比喩］）が，和製漢語の「巨濤」（同＝「大きな浪。大浪」。「〖名〗大きな波。大波」，初出＝「唐人お吉［1928］〈十一谷義三郎〉」）は，『漢大』でも採録されていない。

半世紀余り早く現れた「巨浪」（『日国』＝「〖名〗大きな波。おおなみ」，初出＝「広益熟字典［1874］〈湯浅忠良〉」，漢典＝「水経注－濁漳水」）は，逆に『広辞苑』から除外してある。『現漢』の同項（「〖名〗❶巨大的波浪：海嘯掀起～。❷比喩浩大的声勢：改革開放的～席卷全国」［〖名〗❶巨大な波浪。「津波で巨涛が湧き上がる」❷盛大な威勢の比喩。「改革・開放の盛んな勢いが全国を席巻する」］）は，「怒潮」「狂涛」と同様に比喩の意が強く，「驚涛巨浪」の熟語も有る。

『漢大』の【驚濤】（「震撼人心的波涛」［人の心を震撼させる波涛］，初出＝「三国魏曹丕《滄海賦》」）と，【驚濤駭浪】（「震驚人心的大波涛」［人の心を驚かせる大波］，同＝「宋陸游《長風沙》詩」）との間に，【驚濤巨浪】【驚濤怒浪】（倶に「同“驚濤駭浪”」［「驚濤駭浪」に同じ］）が有る。初出（「清李調元《大風渡黄河歌》」，「宋韓拙《論観画別識》」）が示す様に後者の歴史が古いが，前者は20世紀に「巨浪」と共に頻用され明・清の用例が多い「驚濤怒浪」を上回った。

田漢（1898～1968，劇作家・映画脚本家・詩人）と『金蛇狂舞』を作曲した聶耳の2人組に由って，34年に映画『桃李劫』の主題歌『畢業歌』（卒業の歌）が創られた。日本の侵攻を意識した「掀起民族自救的巨浪！巨浪，巨浪，不断地増長！（中略）快拿出力量，担負起天下的興亡！」（民族自救の巨浪を湧き起せ！巨浪，巨浪，絶えず増えて行く！［中略］早く力を差し出し，天下の興亡を引き受けよ！）との咆哮は，抗日戦争（37.7.7～45.8.15）勝利後も愛唱され今日に至る。

抗日歌『黄河大合唱』（光未然作詞，洗星海作曲，1939）の第7部「保衛黄河」（黄河を守れ）の劈頭に，「風在吼，馬在叫，黄河在咆哮，黄河在咆哮！」（風は吼え，馬は嘶き，黄河は咆哮し，黄河は咆哮する！）と激情が迸る。最後の第8部「怒吼吧，黄河！」（怒号せよ，黄河！）は表題の呼び掛け（3回繰返し）に続いて，「掀起你的怒涛，発出你的狂叫！」（怒涛を巻き起せ。絶叫を上げろ）と，「怒・狂」の波涛・咆哮を喚起する命令形の雄叫びが飛び出る

『現漢』の【咆哮】（「動❶［猛獣］怒吼。❷形容水流奔騰轟鳴，也形容人暴怒喊叫：黄河～｜～如雷」［動❶〈猛獣が〉怒号する。❷水流が奔騰し轟音を放つ様の形容，又人が激怒して喚く事の形容。「黄河が咆哮する」「咆哮雷の如し」］）は，『広辞苑』の説明（「たけりさけぶこと。獣などのほえたけること。また，その声。咆声。“虎の―”」）の脱「水」と違って，猛獣の叫喚から転じて奔流の轟音や人間の怒声を表す多義と，比喩的な意味の多用を示す。

『日国』の補注（「『忠義水滸伝解二三回』に“咆哮 虎ノ吼ル声ナリ”とある」）に獣が出るが，用例（初出＝「黄葉夕陽邨舎詩－後編［1823］一・大猪川歌“大猪之水源何処，滾レ沙漂レ石咆哮去”」）は水声の形容で始まる（3点目の「続々金色夜叉［1899－1902］〈尾崎紅葉〉」も同様）。他は漢典（「抱朴子－清鑒“咆哮者不二必勇一，淳淡者不二必怯一”」）と共に，語釈（「〈名〉ほえさけぶこと。獣などがほえたけること。咆号。比喩的に，勢いの激しい水音や風の音にもいう」）に無い人の怒鳴りを表す。

同義の「咆号」（『広辞苑』＝「たけり叫ぶこと。咆哮」。『日国』＝「〈名〉“ほうこう［咆哮］”に同じ」）は，用例（「美貌の皇后［1950］〈亀井勝一郎〉古塔の天女“大きな口を開いて咆号する化物じみたすがただ”」）の様に，戦後に現れた和製漢語で人間の動物的な喊声を譬える。【咆哮】の最後の用例（「蝗［1964］〈田村泰次郎〉“男の怒号は，熱風の咆哮をひきさくように，殺気がこもっていた”」）は，「怒濤」と同じ両言語共通の「怒号」に目を向かせる。

「潮汐・朝夕」と「民煙・旦夕」

「怒号」（『広辞苑』＝「①いかりさけぶこと。また，その声。“―が乱れ飛ぶ”②風・波などがはげしい音を立てるさまをいう。“荒海が―する”」。『日国』＝「〖名〗1腹を立てて大声で叫ぶこと。また，その声。2風や波が荒れすさぶこと。風や波が荒れ狂って激しい音をたてること」）は，2が漢籍（「杜甫－茅屋為秋風所破歌」）に由来し初出（「清原国賢書写本荘子抄［1530］」）も早いが，漢典（『漢大』所載の「唐杜甫《朱鳳行》」）欠落の1（初出＝「海潮音［1905］〈上田敏訳〉」）が主な意味と為った。

現代の語義の初出（『広辞苑』＝「訳詩集。訳者上田敏。一九〇五年［明治三八］十月刊。イタリア・イギリス・ドイツ・フランスの詩人二九人の作品五七編を訳したもの。高踏派と象徴派の作に重点をおく」）の題は，【海潮】の熟語【海潮音】（「①海波の音。②仏の説法の声の大きいのをたとえた語。潮音。“梵音―”。［書名別項］」）の①である。彼（か）の英文学者・詩人（1874～1916）は人名項で「詩藻に富み，西欧文学の移植に寄与」と記されるが，名訳書の点睛に滋（じ）味深い多義漢単語を用いた。

『日国』の【海潮音】▬（「〖名〗1遠くから打ち寄せる海の波の音。ひたひたと寄せて来るうしおの響き。2仏語。仏，菩薩の，時をたがえず衆生を導き恵みを与えることを，海水が時を定めて干満するのにたとえた語」）は，1の初出（「宝覚真空禅師語録［1346］」）と2（用例＝「落梅集［1901］〈島崎藤村〉」）の異例の仏典２点（「法華経－普門品」「首楞厳経－二」）の様に仏・禅の影響が強い（中国語では仏語由来の2の他に僧侶の一斉読経の声をも表し，『漢大』の出典は「明陳汝元《金蓮記・媒合》」）。

日本語の「海潮」（『広辞苑』＝「海水。うしお」。『日国』＝「〖名〗うしお。海水。海水の流れ」，初出＝「蕉堅藁［1403］」，漢典＝「庾信－哀江南賦」）と違って，『現漢』の定義（「名海洋潮汐。指海洋水面定期漲落的現象」［名海洋の潮汐。海洋の水面の定期的な昇降を指す］）は，【潮汐】（「名❶通常指月球和太陽的引力而産生的水位定期漲落的現象。❷特指海潮」［名❶通常は月と太陽の引力に由って発生する水位の定期的昇降の現象を指す。❷特に海潮を指す］）と一緒である。

『広辞苑』の【潮汐】（「［“潮”はあさしお，“汐”はゆうしお］月および太陽の引力によって起こる海面の周期的昇降，すなわち，しおの干満。普通一日二回の干満があり，満潮から次の満潮までに要する時間［周期］は約半日。一日の潮差は月齢によってほぼ半月周期で変化し，朔望の頃最大［大潮］，上下弦の頃最小［小潮］となり，地形や海深の影響を受けて場所によって異なる」）には，海洋国家らしい関心と百科事典を兼ねた同辞書の追求が現れる。

『日国』の解説（「〖名〗みちしおとひきしお。また，あさしおとゆうしお。月・太陽などの引力によって，海面が一日二回または一回周期的に昇降する現象。満潮から次の満潮までの時間は時と場所によって異なるが，平均一二時間二五分で毎日約五〇分ずつ遅れる。また，潮汐は地殻や大気にも生じ，海洋潮汐に対してそれぞれ地殻潮汐・大気潮汐という。潮［しお］の満ち干。潮［うしお］の干満。潮」）は，更に時間の精度と種類の細分化で完璧を期している。

この明治初の新語（初出＝「小学読本［1873］〈田中義廉〉四“譬へば海水に潮汐あるが如し”」）は，漢籍（「宋史－河渠志“江口毎日潮汐帯レ沙，填二塞上流一”」）から来たが，字・音とも朝潮・夕潮の「朝・夕」と同じで妙味が有る。中国語では原則的に１字は１つの発音しか無く，

異読の有る字は日本語より遥かに少ない約１割であるが,「朝」は向う等の意で cháo と読み，朝等の意は zhāo と為るので，「朝夕」（zhāoxī）は「潮汐」（cháoxī）と同音ではない。

『現漢』の【朝夕】（「❶副天天；時時：～相処。❷名指非常短的時間：～不保｜只争～」［❶副毎日。何時も。「朝も夕も一緒に居る」❷名非常に短い時間を指す。「朝に夕方の無事が保証できない」「只朝夕を争う］）は，最後にニクソンが毛沢東との会見で引いた相手の詞（『満江紅・和郭沫若同志』，1963）の句が使われるが，日本語（『広辞苑』＝「①あさとゆうべ。あさばん。②明けても暮れても。いつも。毎日。③あさばんの食事。［④略］」）との相違は明らかである。

『日国』の【朝夕】（「〖名〗1朝と夕方。あさゆう。転じて，あけくれ。毎日。ふだん。副詞的にも用いる。2［―する］朝と夕方の食事。朝食と夕食。転じて，食事をとること。また，食事。3［―する］常々いっしょにいること。いつも接していること。4時間的に，すぐ近くであること。間近。旦夕。［5略］」）は，1が漢籍（「詩経－小雅・何艸不黄」）に由来し，他は和製語義と為る（1～4の初出＝「万葉［8C 後］」「発心集［1216 頃か］」「蘭東事始［1815］」「徒然草［1331 頃］」）。

2の意味，動詞的用法と熟語（『広辞苑』の【朝夕の煙】＝「炊事の煙。その日の暮し」。『日国』の【ちょうせき の 煙（けむり・けぶり）】＝「朝夕の炊事の煙。炊煙。また，日々のくらし」，初出＝「浮世草子・本朝二十不孝［1686］」）は，「民の煙」（『広辞苑』＝「民衆が炊事するために出る煙。新勅撰和歌集釈教“けふ立つる―の絶えざらば”」。『日国』＝「人民の竈［かまど］から立ちのぼる煙。人民が食事の支度をするために出る煙」，初出＝「新勅撰［1235］」）と共に，中国語以上に暮しへの密着を現す。

「民煙」（『広辞苑』＝「民家から立ちのぼるかまどの煙。また，民家」。『日国』の【民煙・民烟】＝「〖名〗民家から立ちのぼる煙。転じて，一般庶民の家。民家」，初出＝「井上恒一氏所蔵文書－永延二年［988］」）は，『漢大』にも無い和製漢語であるが，同辞書の【朝夕】❼（「指度日之需」［日々を過すのに必要な物を指す］，初出＝《南書・袁湛伝》）も即物的な生活感が出る。日本語の「朝夕」は中国語で同音・同声調（shí）の「時・食」を合一し，「暮し」は「夕」「度日」の両方と重なる。

「暮らす」（『広辞苑』＝「〖他五〗［“暗くする”が原義］①日の暮れるまでの時間をすごす。万五“梅の花ひとり見つつや春日―・さむ”。竹取“あたりをはなれぬ君達夜をあかし，日を―・す，多かり”②時節の終りになるまでの時をすごす。月日をすごす。源竹河“花を見て春は―・しつ”。“三カ月病床で―・した”③［自動詞的に］世をすごす。生活する。狂，惣八“元手はなし，商ひはならず，何とも―・さうやうがない”。“都会で―・す”“この収入で一家五人が―・して行く”［④略］」）は，明暗半々の意味である。

「度日」（『現漢』＝「動過日子［多指在困境中］：～如年［形容日子難熬］」［動日々を過す［多く困難な境遇に居る場合を指す］。「1 日が 1 年の様に長く感じる」［暮しが耐え難い様の形容］］）は，中国人の受難の宿命や貧困層の生き様を映し暗い面が多い。『漢大』の【朝夕】❻（「指時日，光陰」［時日を指す。光陰］，初出＝《後漢書・鄭玄伝》）から，光・影を持ち合せた月日の称に因む成句の「光陰似箭」（光陰矢の如し）が浮かび上がる。

「光陰似箭」と「日月如梭」

『広辞苑』の【光陰】（「[“光”は日，“陰”は月] ①月日。歳月。移り行く時。太平記二三“一人を待たず”②月の光。謡，融“この一に誘はれて月の都に入り給ふ”」）と違って，『日国』（「〖名〗[“光”は日，“陰”は月] 1月日。年月。歳月。とき。2光と影。日光と月光」）の2は対の両方を挙げる。漢籍（「李白－春夜宴従弟桃花園序“夫天地者万物之逆旅，光陰者百代之過客”」）由来の1も和製語義の2も，初出（「続日本紀－養老六年［722］」「本朝無題詩［1162－64頃］」）は漢文・漢詩である。

『漢大』の多義（「❶景象。❷時間；歳月。❸光亮、光芒［❶現象。❷時間。歳月。❸光・光芒］，初出＝「南朝斉王融《秋胡行》」，「北斉顔之推《顔氏家訓・勉学》」，「唐王度《古鏡記》」）に対し，『現漢』（「名❶時間：～似箭｜青年時代的～是最宝貴的。❷〈方〉日子③」［名❶時間。「光陰矢の如し」「青年時代の光陰は最も貴重な物だ」❷〈方〉「日子」③に同じ〈＝暮し〉］）の❷（＝【日子】名❸「指生活或生計：～越過越美」［生活或いは生計を指す。「暮しは益々好くなる」］）は，出典が不明で日本語にも無い。

『広辞苑』の【光陰】に【光陰矢の如し】（「月日の早く過ぎゆくたとえ」）が有り，『日国』には同項（「月日の過ぎるのは，飛ぶ矢のように早い。月日のたつのが早いことのたとえ」，初出＝「曾我物語［南北朝頃］」）と共に，関連の【―の矢（や）】（「月日。時間。月日のたつ早さを飛ぶ矢にたとえたもの」，初出＝「俳諧・詞林金玉集［1679］」［文中「光陰の箭」に作る］），【―の矢文（やぶみ）】（「暦［こよみ］をたとえていう」。初出＝「雑俳・柳多留－一四八［1838－40］」）も立項してある。

【―に関守（せきもり）なし】（「時間や月日が過ぎるのをとどめる番人はいないの意で，月日のすこしもとどまらずに過ぎ去ってしまうことのたとえ。光陰矢の如し」，初出＝「歌舞伎・会稽源氏雪白旗［1888］」）は，5世紀前の南北朝（1336～92）に出た「―矢の如し」の明治版である。【―人（ひと）を待（ま）たず】（「歳月は人間の都合に関係なく過ぎ去って行く。歳月人を待たず」，同＝「太平記［14C後］」［文中「光陰不レ待レ人」に作る］）も類義成句を通じて，同じく漢籍から根源が探し当てられる。

「歳月人を待たず」（『広辞苑』＝「[陶淵明，雑詩“時に及んで当まに勉励すべし，歳月人を待たず”] 年月は人の都合にかかわらず過ぎて行って，少しの間も止まらない。今の時を大切にして努力せよ，という戒めにも用いる」）は，『日国』（「年月は人の都合にかかわりなく刻々に過ぎ去り，瞬時もとどまらない。＊陶潜－雑詩十二首・其二“盛年不二重来一，一日難二再晨一，及レ時当二勉励一，歳月不レ待レ人”」）に用例が無いが，初出が「光陰矢の如し」に近い時代の「光陰不レ待レ人」を派生した様に思える。

『現漢』に有る類似の【時不我待】（「時間不等人，指要抓緊時間：任務緊迫，～」［時間は人を待たない。時間を切り詰める事を指す。「任務が切羽詰っており，時は我を待たず］）は，不特定の人でなく話者に焦点を当てる処が中国的な自己本位の発想である。『漢大』の初出（「曹靖華《飛花集・智慧開花爛如錦》」）は現代の作品であるが，『論語』「陽貨」の「日月逝矣，歳不我与」（日月逝く，歳我と与ならず）に祖形が見える。

『現漢』の【光陰】の例示の「～似箭」は『漢大』の成句項（語釈＝「形容時間消逝的迅速」

［時間が過ぎ去る速さの形容］）で，異形の由来と同形の出典，近似・同義の４字熟語及び用例を列挙する（「語出前蜀韋庄《関河道中》詩：“但見時光流似箭，豈知天道曲如弓。”《京本通俗小説・菩薩蛮》：“光陰似箭，不覺又是一年。”《西遊記》第九回：“光陰似箭，日月如梭，不覺江流年長一十八歳。”亦作“光陰如箭”。宋蘇軾《行香子・秋興》詞：“朝來庭下，光陰如箭，似無言，有意傷儂。”」）。

宋の『京本通俗小説』（著者不詳）も蘇軾も「光陰矢の如し」の初出より早く，漢籍無しの『日国』は産地誤認の可能性が有る。『漢大』で【光陰如箭】（「見“光陰似箭”」）も付くのに『現漢』には項が無いが，【日月如梭】（「太陽和月亮像穿梭似的来去，形容時間過得很快」［日と月は機織の梭（さ）の如く速く行き交（か）う。時がとても速く経つ事の形容］）が有る。『西遊記』（呉承恩［1500頃～82頃］著長篇小説）は日本でも知名度が高いが，「光陰似箭・日月如梭」の対句は注目されていない。

『日国』の【日月（じつげつ）】〓〖名〗（「1太陽と月。ひつき。2つきひ。としつき。歳月。光陰」，初出＝「経国集［827］」「懐風藻［751］」，漢典＝「易経－乾卦」「書経－泰誓」）に，成句項【―矢（や）の如（ごと）し】（「月日のたつのが速いことのたとえ。光陰矢の如し」，出典＝「太閤記［1625］」）が有る。『漢大』不採録の「日月似箭」は清の李緑園（1707～90）著長篇小説『岐路灯』に出たが，中国由来で南北朝時代（1336～92）所産の「光陰矢の如し」に因んだ和製成語の方が早い。

『中国故事成語大辞典』（和泉新・佐藤保編，東京堂出版，1992）の【日月梭（じつげつ さ）の如（ごと）し 日月如梭】で，出典（「“日月如梭，文籍如海，探討不及，朱黄敢怠＝日月梭（じつげつ さ）の如（ごと）く，文籍海（ぶんせきうみ）の如（ごと）し，探討（たんとう）及（およ）ばずして，朱黄敢（しゅこう あ）えて怠（おこた）らん。”［宋・高登『朱黄双硯』］」），用例（「“時光似箭，日月如梭，也有一年之上＝時光（じこう）箭（や）に似（ごと）く，日月（じつげつ）梭（さ）の如（ごと）し，也（ま）た一年（いちねん）の上（うえ）有（あ）り。”［明・馮夢竜『警世通言』巻八］」）が示されたが，『漢大』の【日月如梭】の初出（《京本通俗小説・碾玉観音》）と同じ文は中国語に止まった。

『日国』の【光陰】の熟語・成句７項目の最後は，【―夢（ゆめ）の 如（ごと）し】（「月日は，まるで夢を見ている間のように，はかなく早く過ぎ去るものだ」，出典＝「実隆公記－文明六年［1474］」）に次ぐ，【―流水（りゅうすい）の 如（ごと）し】（「月日のたつ早さを流れ去る水にたとえたもの」，同＝「浮世草子・好色敗毒散［1703］」）であるが，『漢大』の【光陰】❷の初出の「光陰可惜，譬諸流水」（光陰惜しむ可（べ）し，諸（これ）を流水に譬える）を連想させる（「流水」は「逝水」［逝く水］にも作る）。

出典と為る古代中国の家訓の白眉（びは日本でも名高い（『広辞苑』の【顔氏家訓】＝「中国南北朝時代，梁・北斉などの王朝に仕えた顔之推が子孫への訓戒を記した書。二〇編」。『日国』＝「中国の家訓の書。二巻二〇編。六朝時代末の顔之推［がんしすい］著。保身の場を平穏で質朴な家族生活の中に求める立場から，広く政治，学問，思想，風俗などについての見解を示したもの」）が，【光陰】1の漢籍採録は中国で初出と為るこの１節を素通（すどお）りしている。

著者（『広辞苑』の【顔之推】＝「中国，南北朝末期の儒者。字は介。臨沂［山東臨沂］の人。梁・北斉・北周・隋に仕えた。顔家は代々『周礼』『左伝』に通じていたが，之推も学識にすぐれ，文藻に富んだ。著『顔氏家訓』が現存。五三～五九二」，『日国』＝「中国南北朝の文人，学者。山東省臨沂［りんき］の人。字［あざな］は介。初めは梁に仕え，のち北斉，北周，隋に仕える。幅広い学識と豊かな人生体験をもつ。主

著『顔氏家訓』二〇編［五三一～五九〇頃］」）は，唐の「詩仙」李白（701～62）より百数十年早い。

「逆旅・百代」と「寸陰・寸金」

古い例を差し置いて選ばれた【光陰】1の漢典（「夫天地者万物之逆旅，光陰者百代之過客」）は，唐詩名家の名作に対する日本人の傾倒を示す程に日本語への影響が大きい。例えば『現漢』で「名旅館」と1義の語釈のみの「逆旅」は，『広辞苑』の【逆旅】（「［李白，春夜桃李宴に宴する詩，序］［旅客を逆える意］はたごや。やどや。また，旅の意にも用いる」）で当該出典が記され，参照指示が無い異読別項の【逆旅】（「→げきりょ」）も有る。

『日国』の主項目の両義（「〖名〗［“げき”は“逆”の漢音で，迎えるの意］1旅人を迎えること。また，その場所。はたご。やどや。旅館。2旅をすること。旅。旅行」，初出＝「文徳実録－嘉祥三年［850］」，「千五百番歌合［1202－03］」）は，1に異例の漢籍2点（「＊荘子－山木“陽子之レ宋，宿ニ於逆旅一，逆旅有ニ妾二人一”＊李白－春夜宴従弟桃花園序“夫天地者万物之逆旅，光陰者百代之過客”」）に，件の名句に対する選者及び先人の偏愛が現れる。

【百代】（「〖名〗多くの年代。永遠。永劫。はくたい」，用例＝「菅家文草［900頃］」）でも，漢籍の1点目（「管子－覇形“使ニ三軍人城ニ鄭南之地一，立ニ百代城一焉”」）に次いで，李白の文は重複を厭わず引かれる。【百代】（「〖名〗［“はく”“たい”はそれぞれ“百”“代”の漢音］きわめて多くの年代。永遠。ひゃくだい」）の初出（「浮世草子－日本永代蔵［1688］一・一“天地は万物の逆旅，光陰は百代の過客［クハカク］”」）は，他ならぬ未添付の漢籍の訳である。

『広辞苑』でも2項目が有り（【百代】は「［古くはハクタイとも］非常に長い年代。永遠」，【百代】は「→ひゃくだい。奥の細道“月日は―の過客にして”」），前者の熟語項【百代の過客】（「［李白，春夜宴桃李宴序“それ天地は万物の逆旅にして，光陰は百代の過客なり”］永遠に歩き続ける旅人。月日，時間のたとえ。奥の細道“月日は百代の過客にして，行かふ年も又旅人也”」）と合せて，『現漢』の「百代」の不採録との温度差を感じさせる。

日本語の「過客」は『現漢』の意（「名過路的客人；旅客」［名通り過ぎる客。旅人］）と通じるが，両義（『広辞苑』＝「①来訪した人。来客。②通り過ぎてゆく人。旅人」。『日国』＝「〖名〗1旅人。2訪問の客。来客」，初出＝「蕉堅藁［1403］」「艸山集［1674］」）中の来客の方は，由来が漢籍（「韓非子－五蠹“饑歳之春幼弟不レ饟，饟歳之秋疏客必食，非下疏ニ骨肉一，愛中過客上也”」）なのに，中国語では訪問の意味が通過に取って代り，日本では逆に『広辞苑』の順位の様に主と為った。

1の漢籍は【逆旅】【百代】と共通し，第2･3の用例（【百代】の初出，「俳諧・奥の細道［1693－94頃］旅立“月日は百代の過客にして，行かふ年も又旅人也”」）は，『広辞苑』の②の出典（「奥の細道“月日は百代の―にして”」）と共に，名文の日本語に於ける刷り込みと再生産が展示される。【逆旅】（「〖名〗“げきりょ”に同じ」，初出＝「布令必用新撰字引［1869］〈松田成己〉」）も，

明治の暁（あかつき）に千年の歴史を持つ同じ単語の異読形が現れた事で強い生命力を思わせる。

『現漢』の「光陰」の熟語は【寸陰】（「〈書〉㊀日影移動一寸的時間，指極短的時間」〔〈名〉㊀日影（ひかげ）が1寸（いっすん）移動する時間。極めて短い時間を指す〕）に隠れ，用例（「～寸金｜～尺璧〔形容時間極其宝貴〕」〔「一寸の光陰一寸の金」「寸陰尺璧（せきへき）」〕）の前者は，朱熹（き）（1130～1200，南宋の大儒）の「一寸光陰不可軽」に拠る。『広辞苑』の【一寸】の熟語・成句の14項中，この【一寸の光陰軽んずべからず】（「〔“光陰”は時間〕すこしの時間もむだに費やしてはならない」）が有る。

『現漢』では「一寸光陰一寸金」どころか「一寸」の採録も無いが，『日国』の【一寸】の内15の熟語・成句項が有り，【―の光陰】は学術的で謹厳な詳説が施される（「わずかな時間。補注朱熹の偶成詩“少年易レ老学難レ成，一寸光陰不レ可レ軽，未レ覚池塘春草夢，階前梧葉既秋声”からとされているが，朱熹の詩文集にこの詩は見られず疑問。近世初期に五山詩を集成した『翰林五鳳集－三七』には，『進学軒』の題で，室町前期の五山僧惟肖得巌の作としてこの詩が収録されている」）。

次の【―の光陰は沙裏（しゃり）の金（きん）】（「わずかの時間も，砂の中に見出した金のように，大切にしなくてはならない。時は金」）は，「一寸の光陰」と違って和文出典が有る（「世阿彌筆本謡曲・盛久〔1423頃〕」）。『漢大』の【一寸光陰一寸金】（「俗諺。意為時間非常可貴，必須珍惜」〔俗諺。時間は非常に貴重で，大切にしなければ為らないの意〕，初出＝「唐王貞白《白鹿洞》詩之一」）と似通うが，中国では同じ稀少価値の見立てと為る砂金は時間より僅少の機会等の形容に使われる。

「一寸光陰一寸金」と対を成す下の句は「寸金難買寸光陰」（1寸の金で1寸の光陰を買い難い）と言い，『漢大』に無いものの『増広賢文』（明〔1368～1644〕・清に流行した処世訓格言集，作者不詳）の名句として中国で知れ渡っている。『広辞苑』『現漢』『漢大』に無い「寸金」は『日国』で採ってあるが，〖名〗1（「わずかな金。転じて，わずかな量で，価値の高いこと。また，そのもの。寸錦」，初出＝「天正本節用集〔1590〕」）は，漢典の添付も「寸陰」との連用も無い。

「少壮・努力」対「老大・悲傷」

日本語の「寸陰」（『広辞苑』＝「一寸の光陰。ほんのわずかの時間。徒然草“―惜しむ人なし”」。『日国』＝「〖名〗ほんのわずかの時間。一寸の光陰」，初出＝「懐風藻〔751〕」，漢典＝「向秀－思旧賦」）は，同じ中国所縁（ゆかり）の熟語「寸陰尺璧」も有った（『日国』＝「〖名〗直径一尺もあるような大きな璧〔玉〕よりも，わずかな時間を貴いとすること」，初出＝「文明本節用集〔室町中〕」，補注＝「『淮南子－原道訓』に“聖人不レ貴二尺之璧一，而重二寸之陰一，時難レ得而易レ失也”とある」）。

『現漢』では【寸陰】の挙例「～尺璧」の熟語も単語も項が無いが，『広辞苑』は「尺璧」を収録している（「直径一尺もある大きい宝玉。尺玉」）。『日国』（「〖名〗大きな宝玉。貴重な玉」，初出＝「本朝文粋〔1060頃〕」，漢典＝「袁宏－三国名臣序賛“雖レ懐二尺璧一，顧哂二連城一”」）の最後（4点目）の用例（「和俗童子訓〔1710〕三“聖人は尺璧〔セキヘキ〕をたうとばずして，寸陰をおしむべ

しともいえり”」）は，日本で4字熟語と成った「寸陰尺璧」の祖形の和訳である。

『漢大』の【寸陰】（「短暫的時光」［短い時間］），【尺璧】❶（「直径一尺的壁玉。言其珍貴」［直径1尺の宝玉。その貴重さを言う］）は，初出（「晋向秀《思旧賦》」，「三国魏曹丕《典論・論文》」）の前に，「語出 / 本（語源＝）《淮南子・原道訓》」と記す。後者は❷（「比喩美好的詩文」［素晴らしい詩文の比喩］，初出＝「晋潘尼《答陸士衡》詩」），❸（「比喩才能；賢才」［才能の比喩。賢才］，同＝《文選・袁宏〈三国名臣序賛〉》）も有るが，「寸陰」と合せた4字熟語が無く日本語にお株を奪われた。

日本語の「少年老い易く学成り難し」（『広辞苑』＝「［近世初期の『滑稽詩文』寄小人詩に見える。一説に，朱子の作とされる偶成詩の句］月日がたつのは早く，自分はまだ若いと思っていてもすぐに老人になってしまう。それに反し学問の研究はなかなか成しとげ難い。だから，寸刻を惜しんで勉強しなければならない。▷しばしば，このあとに続く“一寸の光陰軽んずべからず”の意味を含めて使われる」）は，『日国』で【一寸の光陰】と同じ補注が付く漢籍由来か和製の熟語である。

中国では「少年易老学難成，一寸光陰不可軽」は朱熹の『偶成』詩の句として知られるが，『現漢』の類似成句は【少壮】（「形年軽力壮：～派｜～不努力，老大徒傷悲」［形若くて気力充実。「少壮派」「少壮努力せずんば，老大徒（いたずら）に傷悲せん］）に出る。【老大】❶〈書〉形（「年老」［年老（お）いた］）の例も同じ10字警句で，初出（『文選（もんぜん）』［周〈前1046～前256〉～南朝梁〈502～57〉の詩文集，梁の昭明太子〈蕭統，501～31〉編］所収『古楽府・長歌行』［無名氏］）は人口に膾炙（かいしゃ）する。

『現漢』の【努力】（「❶動（－//－）把力量尽量使出来：大家再努一把力。形指花的精力多，下的功夫大：～工作｜学習很～」［❷動力の限りを尽す。「皆（みんな）はもう一頑張（ひとがんば）りしよう］❸形使う精力（エネルギー）が多く，入れた力が強い事を指す。「頑張って仕事する」「勉強をとても頑張っている」）は，『広辞苑』（「目標実現のため，心身を労してつとめること。“休まず―する”“―家”」）と同じく，奮闘・努力を尊ぶ東洋の普遍的な価値観を体現して両言語共通の常用度を示す。

『日国』（「〈名〉力をこめて事をすること。あることを成し遂げるために，休んだり怠けたりすることなく，つとめ励むこと。また，それに用いる力」，初出＝「家伝［760頃］」）には，語誌の説明（「奈良時代や平安時代初期の文献にすでに見えるが，院政期や中世の古辞書類に登載されていないところから，近世ではあまり一般的ではなかったと思われる。広く用いられるようになるのは明治以降で，挙例の『哲学字彙』でeffortの訳語として採用された」）と有る。

漢典は他ならぬ「古楽府－長歌行“少壮不‗努力，老大乃悲傷‗”」で，「悲傷」（『広辞苑』＝「かなしみいたむこと。かなしくいたましいこと。悲愴（ひそう）」。『日国』＝「〈名〉悲しんで心をいためること。また，悲しくいたましいこと」，初出＝「文華秀麗集［818］」，漢典＝「晉書－羊祜集」）は，『現漢』（「形傷心難過：他聴到這一噩耗，不禁～万分」［形心を痛めて辛い。「彼はこの悲報を聞いて，極度の悲痛を禁じ得なかった］）と通じるが，「乃」（即（すなわ）ち）は中国語版の「徒」の徒労感が字・義に出ない。

日本語の「少壮」（『広辞苑』＝「①年の若いこと。二〇歳から三〇歳ごろまでの称。②若くて元気のよいこと。藤村，夜明け前“―な志士達とも友達が往来を始めることを知つた”」。『日国』＝「〈名〉［形

動］年の若いこと。一般的には二〇歳から三〇歳ぐらいまでの年齢にいう。また，年が若く元気なこと。また，そのさま」，初出＝「田氏家集［892頃］」，漢典＝「管子－問“少壮而未レ勝二甲兵一者，幾何人”」）は，20歳代とする規定に日本的な緻密さや成人年齢（中国では18歳）との関連を感じさせる。

「老大」（同＝「①少壮の時を過ぎて年をとること。↔少小。②十分熟して身についていること［②出典略］。「〖名〗［形動］1［―する］年をとっていること。あるいは，年を経ること。また，そのさま。2重く大きいこと。はなはだしいさま」，初出＝「文華秀麗集［818］」「正法眼蔵［1231－53］」，1の漢典＝「杜甫－自京赴奉先県詠懐詩」）は，2も『現漢』の❺副（「很；非常［多用於否定式］：～不高興｜心中～不忍」［とても。非常に［多く否定形に用いる］。「大層（たいそう）不愉快」「心中甚（はなは）だしく忍びない」］）と通じる。

「老大徒傷悲」の「傷悲」（『漢大』の語釈＝「悲傷」，初出＝《詩・小雅・采薇》）は『現漢』『日国』に無いが，『日国』の【少壮】の漢典の11字中3字を含む成句「少壮幾時（いくとき）ぞ」（「人生は，若く勢いのよい時はきわめて短く，すぐに老衰の時が来るという意。＊前漢武帝－秋風辞“歓楽極兮哀情多，少壮幾時兮奈二老何一”」。『広辞苑』＝「［漢武帝，秋風辞“少壮幾時ぞ老いを奈何（いかん）せん”］若くて元気な時は極めて短くて，すぐに老衰の時が来る」）が有り，本国よりも中国の古語を生かしている。

「不／可惜身命」と「安身／心立命」

「尺璧」の和文例中の「寸陰をおし（惜）むべ（可）し」の動詞・助動詞の字・義は，中国語の「可惜」（「動令人惋惜：機会難得，錯過了実在～」［動人を惜しませる。「得難い機会で，逃すと実に惜しい」］）と一致する。中国語の「可愛／可笑／可悲／可憐」は日本語で同義の「可愛（かわい）い／可笑（おか）しい／可哀想（かわいそう）／可憐（あわ）」に為り，この語も同類の「可惜（あたら）」（『広辞苑』＝「〖副〗［説明略］惜しくも。もったいないことに。惜しむべき。あったら。［出典略］“―若い命を捨てた”」）が有る。

「可惜身命（みょう）」（『広辞苑』＝「体や命を大切にすること」。『日国』は同義［“大切”は平仮名］，出典無し）より，「不惜（しゃく）身命」（同＝「仏法のためには命を惜しまずにささげる」。「〖名〗［『法華経－譬喩品』の“若人精進 常修二慈心一 不レ惜二身命一 乃可二為説一”による語］仏語。仏道を修めるためには，あえてみずからの身命をもかえりみないこと。また，その心構えや態度。一般に，仏道以外の物事についてもいう」，初出＝「日蓮遺文－御義口伝［1278］」）が，相撲力士の昇進口上で好く使われる。

「身命」（同＝「からだといのち。しんめい」。「〖名〗［“みょう”は“命”の呉音］＝しんめい［身命］」，初出＝「往生要集［984－985］」）に対し，「身命（めい）」（同＝「いのち。しんみょう。“―を擲（なげ）つ”」。「〖名〗からだのいのち。身体または生命。しんみょう」，初出＝「御迦草子・弁慶物語［室町末］」，漢典＝「漢書－鄭崇伝“臣願二以身命一当二国咎一”」）は，成句の「身命を賭（と）する」（「命をかけるほどの心意気で取り組む」。「いのちをかける。いのちをなげうつ」，出典無し）も有る。

『現漢』の【身家】（「名❶本人和家庭：～性命。❷旧時指家庭出身：～清白。❸指家産：～過億」［名❶本人と家庭。「一家の命」❷昔，出身の家庭を指した。「出自（しゅつじ）に汚点が無い」❸家の資産を指す。

「家の資産が億を超える」]）の❶の用例は，死語化した「身命」の略形の様に見える。「性命」（「名人和動物的生命」［名人間と動物の生命］）と合成した熟語は全存在・全財産の表現と為り，「以身家性命担保」（自分と一家の命を以て保証する）と言う啖呵（たんか）にも用いられる。

『漢大』の【身家】（「❶本人和家庭。❷指家産。❸指身分地位。❹指家世，家庭出身」，初出＝「明湯顕祖《達奚司空立南海王廟門外》詩」「《二刻拍案驚奇》巻二六」《醒世恒言・蔡瑞虹》「清秋瑾《敬告中国二万万女同胞》」）の次に，【身家性命】（「全家的生命和財産」［一家の生命と財産］）と有るが，初出（「《水滸伝》第一〇八回」）の作品が愛読された日本では成語に為っていない。「身命」も日本語に於ける未熟の以前の問題として，漢籍の影響で生れたのかも不明である。

『日国』で和製とされた「身家」（「〖名〗身体と家。自分のからだと家族。からだや家など，自分に関するすべてのもの」，初出＝「随筆・折たく柴の記［1716］」）は，『広辞苑』には入っていない。「性命」（「〖名〗生まれながらの素質と天から授かった運命。また，いのち。生命」，初出＝「続日本紀－天平四年［732］」，漢典＝「易経－説卦」）は，『広辞苑』も収録している（「①万物が天から授かったそれぞれの性質と運命。②いのち。生命」）が，語義の半分が現代中国語と違い合成熟語も無い。

「身命」を含む両言語共通の熟語「安身立命」は，『現漢』の【安身】（「動指在某地居住和生活［多用在困窘的処境下］：無処～｜我有了～之地，母親也就放心了」［動ある土地に居住・生活する事を指す〈多く困窮の状況下に用いる〉。「身を落ち着ける処が無い」「私が身を落ち着ける地を得ると，母親も安心した］）の次に在り（「生活有着落，精神有所寄托：～之所」［生活が落ち着き，精神に拠り所が有る］），『漢大』で《景徳伝灯録・景岑禅師》が初出とされ「《水滸伝》第二回」の例が続く。

『日国』の【安身】（「〖名〗1身の安楽なこと。安らかな身。また，心身を安らかにすること。2一身を安泰にすること。身を立てること」，初出＝「南遊集［1364頃］」「読本・唐錦［1780］」，1の漢典＝「呂氏春秋－論大」）の熟語項も，【あんしん 立命（りゅうみょう）】（「禅のさとりを得て，自分を打ち立てること」，初出＝「童子訓［1707］」）であるが，『広辞苑』には「安身立命」どころか「安身」の項も無い。

1字違う関連の熟語として，『日国』に【安心立命（りつめい）】（「〖名〗仏教で，人力を尽してその身を天命に任せ，どんな場合にも落ち着いていること。天命を知って心を平安に保ち，下らないことに心を動かさないこと。仏教では，“あんじんりゅうめい［安身立命］”と訓み，主に禅宗で，悟りの境地に到達して真の心の安らぎを得，主体性を確立すること」，初出＝「いさなとり［1891］〈幸田露伴〉」，仏典＝「天目高峰禅師－示衆語」），【安心立命（じんりゅうみょう）】（「“あんしん［安心］りつめい［立命］”に同じ」）が有る。

【安心】（「〖名〗［“あんじん”とも］1［―する］心が安んじること。気がかりなことがなくて，心が落ち着くこと。2［形動］心が安らかで心配のないこと。また，そのさま。3［あんじん］仏語。信仰によって，心が不動の境地に達すること。浄土教では，特に阿弥陀仏を信じて疑わないこと。4内心のくふうをすること。奥義に達するための心づかい」，初出＝「玉塵抄［1563］」「滑稽本・東海道中膝栗毛［1802－09］」「大応国師法語［1308頃］」「花鏡［1424］」）は，多様の由来で成った多国籍の多義語である。

1に漢典（「白居易－得微之到官書，備知通州之事，悵然有感詩」），3に仏典（「景徳伝燈録－三」）が付くが，語誌(1)の解説（「儒教の安心立命の語から出て，禅僧の菩提達磨［ぼだいだるま］が仏教徒として初めて用いた。その後天台宗の智顗［ちぎ］が仏法の道理のままに心が安定したことを善巧［ぜんぎょう］安心といい，浄土教の善導［ぜんどう］は“観無量寿経”の至誠心［しじょうしん］・深心［しんじん］・四向発願心の三心を安心と名づけ，往生に不可欠の要素とした」）の通り仏教の色彩が濃い。

(3)の考証（「中・近世には連濁形アンジンが通行しており，『文明本節用集』『日葡辞書』『易林本節用集』『運歩色葉集』は，みなアンジンである」）は，「あんじん」と訓(よ)む3の仏語が長年に亘って主要な意味を為し続けた事を裏付ける。『広辞苑』は『日国』と逆に【安心立命(じんりゅうみょう)】（「心を安らかにして身を天命に任せ，どんな場合にも動じないこと。立命は儒教より出た語」）を主項目とし（【安心立命(しんりつめい)】は「→あんしんりゅうみょう」），語釈中の儒教由来とは裏腹に仏語読みを優先する。

「安神・安堵」と「放心・安生」

『広辞苑』の副(サブ)は【安心感】（「安心できる感じ。“―のある対応”」）と共に，【安心・安神】（「心配・不安がなくて，心が安らぐこと。また，安らかなこと。“それなら―だ”“まだ―できない”“親を―させる”」「御―ください」）に付く。『現漢』の【安心】[2]（「形心情安定：～工作｜家里事多，在外也難～」［形気持が落ち着いている。「安心して仕事する」「家の事が多く，外に居ても安心し難い」］），『日国』に無い【安神】（「動使心神安定」［動精神を安定させる］）は，後者の品詞以外に日本の２語と合う。

件の語誌(4)（「“安心”と“安堵”は現代語で意味が類似するが，“安心”には，形容動詞的な用法があるのに対して，“安堵”にはそれがないという違いがあり，また，“安心”は，より持続的な事態を表現し，“安堵”は，かなり瞬間的な事態を表現する」）は，類語（『広辞苑』＝「［堵(かき)の中に安んずる意］①居所に安住すること。②安心すること。“ほっと―する”③鎌倉・室町時代に，幕府・領主などが支配下の武家・社寺の所領の知行(ちぎょう)を保証し，承認すること。［中略］“本領を―する”」［全出典略］）の異同を説く。

『日国』の同じ意（「〈名〉［“堵”は垣の意］」1［―する］垣の内に安んじて居ること。転じて，土地に安心して住むこと。家業に安んずること。また，安住できる場所。2［―する］心の落ち着くこと。安心すること。3［―する］中世，幕府や戦国大名が御家人・家臣の所領の領有を承認すること。特に，親から受けついだ所領の承認を本領安堵という。［4 5略］」，初出＝「続日本紀－和銅二年［709］」「保元［1220頃か］」「吾妻鏡－治承四年［1180］」）は，1に漢典（「史記－高祖紀」）が付される。

「安心」と類義の和製語義の2は1 3の後に出たが，『漢大』の語釈「安居」（『現漢』＝「動安定地居住、生活：置業～」［動安定的に居住・生活する。「土地・家屋を所有して居所に安んずる］。『広辞苑』①＝「心を安らかにして暮らしていること」。『日国』の〈名〉1＝「心安らかに暮らすこと。落ち着いた生活をすること」，初出＝「将門記［940頃か］」，漢典＝「孟子－滕文公・下」）は，安住や領有承認に由る安心感の必然性と大きさを思わせる。

『現漢』の【安堵】（「〈書〉動安定地生活：～如常」［〈書〉動安定的に生活する。「平常通り安らかに暮す」］）は，壁や塀の内に安住するという古来の語義である。「堵」は「墻」（壁。塀）を表す文語や壁・塀を数える量詞の他，動詞の「堵塞」（塞ぐ）と形容詞の「悶；憋気」（悶々とする。胸が塞がる様に息が詰まる，息苦しい）の意が有る。発音（āndǔ）が近い同形の日本語の瞬時的な安心感は異質な発想で，強いて言えば字面から胸の悶えが下りた形象を連想し頷ける。

中国語の「安心」と類義の「放心」（「動心情安定，没有憂慮和牽掛：你只管～，出不了錯｜看到一切都安排好了，他才放了心」［動気持が落ち着き，憂慮と係累が無い。「貴方は安心して可い。失敗は有り得ない」「全て上手く段取りが着いたのを見て，彼はやっと安心した」］）は，日本語（『広辞苑』＝「①ほかの事物に心をうばわれてぼんやりすること。心が身に添わないこと。“―の態”②心にかけないこと。安心すること。放念。放神。“どうぞ御―下さい”」）と一部しか共通しない。

『日国』の多義（「〖名〗1良心を失うこと。また，ほかのことに迷って本体を失った心。2ほかに気をとられて，又何も考えずにぼんやりすること。3心配することをやめること。安心。放神。放念」）の内，漢籍２点（「書経－畢命」「孟子－告子上」）が付く1は，初出（「仮名草子・色物語［1661－73頃］」）が一番古いが廃れている。2より早い3（同＝「浮雲［1887－89］〈二葉亭四迷〉」，「文明論之概略［1875］〈福沢諭吉〉」）も，中国語離れの中で和製語義に対して常用でない方に後退した。

【安心】（「〖名〗⇒あんしん［あんしん］」）で仏語読みは副項目と為るが，『広辞苑』の同項（「〔仏〕①信仰により心を一所にとどめて不動であること。②弥陀の救いを信じて一心に極楽往生を願う心。③宗派の教法の根本眼目。日葡辞書“コレワガシュウ［宗］ノアンジンナリ”」）は，熟語項の【安心決定】（「ひたすら信じて疑わないこと。信念を得て，心を動かさないこと」）と【安心立命】が有り，『日国』の【安心】の語源説に有る儒教の「安心立命」と並ぶ仏語系の存在感を現す。

「立命」（『広辞苑』＝「天命を全うし人為によって害さないこと。りゅうめい。“安心―”」。『日国』＝「〖名〗天命を全うして人為によって害さないこと。天命に任せて心静かにしていること。安心立命」，初出＝「孟子－尽心・上」）には，仏教縁の「立命／立命」の項が無い。用例が無いものの次の【立命館大学】の命名（1913）の様に，この儒教由来の単語（『漢大』の語釈＝「謂修身養性以奉天命」［身を修め徳を養い，以て天命を奉じる］，初出＝《墨子・非命・上》）は日本に生きている。

『日国』の【安心立命】に有る「安身立命」の仏教訓みは２語の交錯を示唆するが，中国語の「心・身」は発音の違い（xīn，shēn）も有って混用できない。『現漢』の【安身】【安身立命】の下に同音・異声調の【安神（shén）】が出て，次の【安生（shēng）】の形❶（「生活安定：過～日子」［形生活が安定している。「形安穏な暮しをする」］［❷略］），【安適（shì）】（「形安静而舒適」［形安静で快適］［用例３点略］）も，発音が近い上に同じ安泰・安寧・安穏の意を表す。

「独善其身」と「己身中心」

【安】の 93 項中 61 番の【安身】の 21 項後【安心】[2] が出て，前の【安心】[1]（「動存心；居心：～不善｜誰知道他安的什麽心？」［動下心を持つ。企む。「善からぬ了見を起す」「彼はどういう目論見なのか誰も分らない」］）は邪悪の意である。次の【安逸（yì）】に続く【安営（yíng）】（「動［隊伍］搭起帳篷住下，也泛指建立臨時駐地：撮制組已在小鎮～」［動［隊伍が］天幕を張って駐屯する。又一般に臨時の居所を立てる事を指す。「撮影班は已に小さい町に設営した］）は，軍隊の行動が元である。

次の【安営扎寨】（「原指軍隊搭起帳篷、修起柵欄住下，現泛指軍隊或其他団体建立臨時駐地」［元は軍隊が天幕を張り砦を築いて駐屯する事を指し，今は一般に軍隊或いはその他の団体が臨時の居所を立てる事を指す］）は，戦の背景と寨の構築に安身・安保の必要性を思わせる。『広辞苑』の「安保」（「①安全保障の略。“―条約”②安保闘争の略。“六〇年―”」）に対し，『現漢』の【安】の 2 番と為る同項（「形属性詞。安全保衛的：～工作」［的＝の］）は，個人・集団等の安全確保の意が強い。

『漢大』にも無い和製漢語「設営」は，『広辞苑』（「駐軍の場合の諸施設を前もって準備すること。また，一般に，会場や宿泊・会合などの準備をすること。“観測基地の―”“宴会を―する”」）と違って，『日国』の語釈・用例（「〖名〗1施設・建物・会場などを前もって設備し，準備すること。2俗に，会合や集まりなどの用意・準備をすること」，1の初出＝「帰郷［1948］〈大仏次郎〉」，2は出典無し）は，駐軍の意味も無く料理屋に関する表現として戦後に現れた。

「安心」「安営扎寨」の両義に「安危」の両面が見られるが，その第 72 の項（「名安全和危険，多偏指危険的一面：為了保護国家財産，消防隊員們置個人～於度外」［名安全と危険，多く危険の一面を指す。「国家の財産を守る為に，消防隊員たちは個人の安危を度外視する」］）は，日本語（『広辞苑』＝「安全か危険かということ。“一国の―存亡にかかわる”」。『日国』＝「〖名〗［“あんぎ”とも］安全と危険。安全であるか，危険であるかということ」）の均等に視る意味と違う。

漢籍（「史記－項羽本紀」「書経－畢命」）に由来し，初出（「和漢朗詠［1018 頃］下“四海の安危は掌の内に照らし，百王の理乱は心の中に懸けたり〈白居易〉”」）は唐詩の訳で，次の用例（「源平盛衰記［14C 前］一“一天の安危［アンキ］身に由り，万機の理乱掌に在りければ”」）も，漢字の 5/12 が彼の中唐（766～835）の詩人（772～846）の句（「四海安危照掌中，百王理乱懸心中」）を借用した本歌取りであるが，戦乱等の多寡の差を現す様に中国では「危＞安」の傾斜が定着した。

「安営扎寨」と関る【山寨】❶の語釈中の「設有防守柵欄」（防御用の柵を設けた）から，「設防」（「動布置防衛力量：步步～◇両人朝夕相処，思想上互不～」［動防衛の武装を布く。「1 歩進む度に砦を築く」「〈比喩的に〉2 人は朝も夕も一緒に居り，思想上で互いに警戒しない］）が連想される。「步步為営」（「軍隊前進一步就設下一道営塁，形容行動謹慎，防備厳密」［軍隊が 1 歩進む度に砦を築く。行動が慎重で防備が厳密な様の形容］）も，「安営扎寨」の挙動で要所・節目毎に守りを固める事に譬える。

【安】の最初の項は「安邦定国」（「使国家安定、鞏固」［国家を安定・鞏固にする］）であるが，「立命」を首唱した儒教の亜聖孟子（前 372 頃～前 289）の命題に，「天下之本在国，国之本在家，家之本在身」（天下の本は国に在り，国の本は家に在り，家の本は身に在る）も有る。彼の「窮

則独善其身，達則兼済天下」（窮すれば則ち独り其の身を善くし，達すれば則ち兼ねて天下を済う）も，「安身立命」が有り「安心立命」が無い中国語の優先順位の説明に為り得る。

【独善其身】（「《孟子・尽心上》：“窮則独善其身。”意思是做不上官，就搞好自身的修養。現在也指只顧自己，欲乏集体意識」［『孟子・尽心上』に曰く，「窮則独善其身。」官吏に成れなければ自身の修養を善くするの意。今は又，只自分だけを顧み，集団意識に欠ける事をも指す］）は，『広辞苑』の【独善】（「①自分一人だけが善くあろうと思い，また努めること。②自分だけが正しいと信じて，客観性を考えずにふるまうこと。ひとりよがり。“―的”“―に陥る”」）と共通・相異の両方を持つ。

『日国』の両義（「〈名〉［『孟子－尽心上』の“窮則独善二其身一，達則兼善二天下一”による語］1他人に関与しないで，自分の身だけを正しく修めること。2客観性がなく自分だけが正しいと考えること。ひとりよがり」）は，前者（初出＝「経国集［827］」）より11世紀遅い（同＝「サフラン［1914］〈森鴎外〉」）は，【独り善がり】（〈名〉［形動］自分ひとりだけでよいと思いこんで，他の人の言うことを聞こうとしないこと。また，そのさま。どくぜん」，同＝「浮雲［1887－89］〈二葉亭四迷〉」）から来た。

中国語の「独善其身」と日本語の「独善」の両義の善→悪の変質は，窮乏の故に我が身しか顧みない自己本位に要因が在ろう。劉再復（1941～　，文芸評論家）は88年に中国の国民性に有る「己身中心主義」を喝破したが，「己身」は『漢大』にも無い和製漢語（『広辞苑』＝「自己のからだ。自身」。『日国』＝「〈名〉仏語。自分のからだ。自分自身。自身」，初出＝「車屋本謡曲・当麻［1345頃］」，仏典＝「法華経－如来寿量品」）で，20世紀後半の日本語の逆輸出の事例と為る。

「身心・心身」と「信心・信神」

日本の両辞書の【己身の弥/彌陀】は「己心の弥/彌陀」に同じと為り，主項目（『広辞苑』＝「弥陀は浄土にあるのではなくて，却って自分の心［身］にそなわっているということ」。『日国』＝「仏語。己［おのれ］の心にある阿彌陀如来。阿彌陀如来は，極楽浄土にあるのではなくて自分自身の心にあるということ。己身の彌陀」）は，初出（「謡曲・実盛［1430頃］」）が副項目（「改邪鈔［1337頃］」）より遅く，「安身立命→安心立命」と同じ「身→心」の混用・推移を呈する。

『日国』の【身心・身神】（「〈名〉［古くは“しんじん”とも］1身体と精神。からだとこころ。心身。心人。2からだ。身体。心をあわせもつからだ」，初出＝「観智院本三宝絵［984］」「方丈記［1212］」，「身神」は1の5点中4番目の「内地雑居未来之夢［1886］〈坪内逍遥〉」に見える）は，【心身・神身】（「〈名〉［古くは“しんじん”とも］“しんしん［身心］①”に同じ」，「神身」の出処＝7点中5番目の「狐の裁判［1884］〈井上勤訳〉」）と同じ文献に現れたが，後者の語釈の通り主項目と為る。

『広辞苑』の【身心】（「からだとこころ」）は用例が無い半面，熟語【身心脱落】（「〔仏〕身心が脱け落ちること。一切の束縛から解放されること。道元は，師の如浄のこの語によって悟りを開いたという」）が有る。【心身】（「［古くはシンジンとも］精神と身体。こころとからだ。身心。“―ともに疲労”」）

は用例も付き，熟語【―医学 / 症 / 障害者 / 障害者対策基本法 / 相関 / 心身問題】が示す様に，「心技体」（「武道などで重視する，精神・技術・肉体の三つの要素」）と似た「心」の優位を占める。

【心身・神身】の最後の例（「教育基本法［1946］一条“自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を”」）に，国の採用で国語の規範と為った経緯が窺える。『現漢』の【身心】（「㊀身体和精神：大力開展文娯活動，増進職工～健康」［㊀身体と精神。「大いに文芸・娯楽活動を展開し，従業員の身心の健康を増進する」］）も，『広辞苑』の【心身】の用例中の「疲れ」と逆の「健康」と連用するが，心より身を重んじ勝ちの中国では専ら「身心」を使い「心身」は『漢大』にも無い。

中国語の「神」（shén）は声調 / 音・調とも違う「身 / 心」と混用できず，『広辞苑』の【身心 / 心身】で併記しない「身神 / 神身」は抑々（そもそも）無い。同書の【心身】の次の【心神】（「こころ。精神。たましい。今昔一五“我れ―変らず”」）は，熟語項（【―耗（こう）弱者 / 喪失者 / 喪失者等医療観察法】）も含めて，『現漢』の語義・用法（「㊀❶心思精力：劳而無功，空耗～。❷精神状態：～不定」［㊀❶思案・精力（エネルギー）。「労して功が無く，心神を空（むな）しく消耗（もう）した］❷精神状態。「心神不安定」］）と通じ合う。

『日国』の同項（「〖名〗こころ。精神。気分。気持。魂。神心」，初出＝「万葉［8C 後］，漢典＝「魏書－釈老志」）も両言語共通であるが，「神心（しん）」（「〖名〗1“しんしん［心神］”に同じ。2神の心」，初出＝「左経記－長和五年［1016］」「本朝麗藻［1010 か］，2の漢典＝「応貞－晉武帝華林園集詩」）は，『広辞苑』には無い。一方，『漢大』の【神心】❶（「猶心神。謂魂与心」［「心神」に同じ。魂と心を謂う］，初出＝「戦国楚宋玉《神女賦》」）は1と同義である。

❷（「猶聖心。謂天子的心」［「聖心に同じ。天子の心を謂う］，初出＝《文選・応貞〈晋武帝華臨園集詩〉》）は，2と違って天神（じん）ならぬ天子の心を指す。自身への支配が及ばない神より統治者の帝王を畏れる現実主義が窺えるが，聖上（『広辞苑』＝「天子の尊称」。『日国』＝「〖名〗天子を敬っていう語。主上［しゅじょう］」，初出＝「小右記－寛弘五年［1008］」，漢典＝「晉書－周馥伝」）の心を表す「聖心」は，中国では君主制の廃止に伴って廃語と為った。

日本語の「聖心」（『日国』＝「〖名〗尊い心。純粋で，けだかい心。天子や聖人のみ心。聖意。御意［御意］。叡慮［えいりょ］」，初出＝「性霊集－三［835 頃］」，漢典＝「荀子－勧学」）も，上皇后美智子の出身校（女子学院・女子大学）の名称として知られる半面，滅多に使われず『広辞苑』にも入らない。『漢大』に無い和製熟語「心技体」の『日国』の不採録と共に不思議であるが，同音（中国語で全く別の読み方）の「精神」を重んじる志向は「安心立命」「心身」に現れる。

日本の辞書は能（よ）く「古くは」で古訓を示すが，「古訓」（『広辞苑』＝「①古人の訓戒。②漢文や漢字などの古いよみかた」。『日国』＝「〖名〗1古くから伝えられた教えやいましめ。昔の人の訓戒。2漢字や漢文に付けられた古い時代の訓」，初出＝「音訓新聞字引［1876］〈萩原乙彦〉」「文芸類纂［1878］〈榊原芳野編〉」，1の漢典＝「詩経－大雅・烝民」）の和製語義は，『現漢』（「㊀指古代流伝下来的，可以作為準則的話」［㊀古代から伝って来た，準則として可（よ）い言葉を指す］）には出ない。

『日国』の【身心・身神 / 心身・神身】に有る古訓と同音の「信心（じん）」は，多義の和製漢語（「〖名〗

1仏語。一般に三宝や因果の理法を信ずる心。これを仏道にはいる第一歩とし，初門という。また浄土教では阿彌陀仏の本願を信ずることをいう。2［—する］神や仏の力を信じて，その加護を願って祈ること。また，そのこころ。3［—する］ある人間を心から慕いあこがれること」，初出＝「霊異記［810－824］」「日葡辞書［1603－04］」「人情本・仮名文章娘節用［1831－34］」）である。

『広辞苑』の項（「神仏を信仰して祈念すること。また，その。信仰心。“—が篤い”」）は単純であるが，熟語の【信心家】（「神仏を信心する人」），【信心決定（けつじょう）】（「〔仏〕疑念をさしはさまない信心。弥陀の救済を信ずる心が確として動かないこと」），【信心過ぎて極楽を通り越す】（「信心に凝りすぎてかえって本当の信心を見失うことをいう」），【信心は徳の余り】（「信心するのは，生活に余裕があっての上のことである。衣食住に忙しくては，信心を起こすひまがない。後生（ごしょう）は徳の余り」）が有る。

『日国』の成句は【—過ぎて極楽を通り越す】（「信心も度が過ぎると，かえって邪道におちいって救われず，害になる」），【—の家に悪魔来（き）たらず】（「神仏を信心する人は，その加護によって災難や不幸にあわない」），【—は徳の余り】（「“しんじん［信神］は徳の余り”に同じ」）で，【信神】の唯一の成句が【—は徳の余り】（「神仏を信心するのは，生活にゆとりがあっての上のことである。後生［ごしょう］は徳の余り。信心は徳の余り」，初出＝「落語・佃祭［1895］〈四代目橘家円喬〉」）である。

【信神】（「〖名〗神の霊力を信じ，その加護を願い求めること。神［かみ］信心」）は，成句の後に出た（初出＝「落語・百人坊主［1896］〈四代目橘家円喬〉」）後，流通寿命は還暦を越えず『広辞苑』の不採録で消えたが，前項の「信心」の本質の説明として役立つ。中国語でも神を信じる意の「信神」は『漢大』でも特に無いが，『現漢』の【拝佛】（「動向仏像行礼：焼香～」［動仏像に向って礼拝する。「線香を上げて参拝する」］）と対を為す。

「後生 / 信心 / 信神は徳の余り」と「後生より今生が大事」

「後生は徳の余り」の両義（『広辞苑』＝「来世での幸福はこの世で徳を積んだ結果である。また，くらしむきが豊かでないと信心して後生を願う余裕がない意にも。信心は徳の余り」。『日国』＝「熱心に徳行を積めば，おのずから来世の極楽往生も得られるものである。一説に，信心も暮らしむきに余裕があってこそできるの意とする。信心は徳の余り」。初出＝「洒落本・無頼通説法［1779］」）では，1 世紀後に出た「信心 / 信神は徳の余り」の意は副次的・異説と為る。

この「後生」（『広辞苑』＝「①〔仏〕㋐死後ふたたび生まれ変わること。また，後の世。来世。→前生（ぜんしょう）・今生（こんじょう）・後世（ごせ）。㋑来世の安楽。極楽往生。②極楽往生を願って，この世で徳行を積むこと。③［“後生を願う”］人に折り入ってたのむ時にいう語」［出典〈各 1 点〉略］）も，同書で列挙された複合語・諺・成句（【—一生 / 気 / 嫌い / 心 / 善処 / 大事 / 立て / 頼み / 願い / 始め / 菩提 / 楽 / 願いの六性悪 / は徳の余り】）も，仏語が由来で専ら教所縁の意味か派生の語義ばかりである。

『日国』の多義（「〖名〗1［前生，今生〈こんじょう〉と対応して用いる］仏語。死後の生存のこと。

死後の世。死後に住む世界。または，死後生まれかわること。後世［ごせ］。来世［らいせ］。あの世。2極楽に生まれること。極楽に生まれて安楽を得ること。また，その安楽。極楽往生。3極楽往生を念願して，この世で徳行を積むこと。功徳としての慈悲深い行為。4人におりいって事を頼みこむときに用いる語。許しを請うこと。哀願すること。お願い」）も，懇願の意の様に現世の現実的な働きを併（あわ）せ持つ。

成立順で1～3に次ぐ4（初出＝「霊異記［810－824］」，「御堂関白記－寛弘八年［1011］，「仮名草子・恨の介［1609－17頃］」，「浄瑠璃・女殺油地獄［1721］」）に就いて，補注(1)（「近世に生まれた④の用法は，“後生だから＝私の願いを聞き入れることはあなたの来世の安楽のための功徳を積むことだから”の意で，③を踏まえた意味・用法であると考えられるが，“再生という無理なことをわかっていながら頼む”と解する見方もある」）は，信心深い情念と俗人的な発想の両面を指摘する。

成句項は【―が悪い】（「1来世の極楽往生もおぼつかない。転じて，あと味が悪い。2運にめぐまれない」，初出＝「浄瑠璃，心中宵庚申［1722］」「人情本・婦女今川［1826－28］」）と【―は徳の余り】の他，【―より今生が大事】（「将来のことよりも，今が第一である」，初出＝「譬喩尽［1786］」）と，『広辞苑』で③の説明に有り項を設けない【―を願う】（「仏の慈悲心を信じて，極楽往生を願う。転じて，仏の加護を頼み幸運を祈る」，初出＝「曾我物語［南北朝頃］」）が有る。

「後世（ごせ）」（『広辞苑』＝「〔仏〕①三世の一つ。死後に生まれ変わる世界。あの世。来世。ごせい。2後生善処（ごしぜんしょ）に同じ。［出典略］」）は，「後生善処」（同＝「来世には極楽や天界に生まれ変わること。後生清浄（しょうじょう）［出典略］」。『日国』の【後生善処（しょ）・後生善所（しょ）】の初出＝「栄花［1028－92頃］」）と同じ極楽往生の期待を込める。参照を指示する【後世を弔う】（「故人の来世での安楽を願って法事を行う」，同＝「米沢本沙石集［1283］」）も，他者・死者の極楽成就・天界入りへの祈願を表す。

『日国』の項（「〖名〗仏語。1生まれかわった後の世。後生［ごしょう］。来世。2死後の世界で幸福に暮らすこと。後世の安楽。3⇨こうせい［後世］」，1 2の初出＝「落窪［10C後］」「観智院本三宝絵［［984］］」，1の仏典＝「大集経－一六」）は，語誌(1)（「［前略］類義の“後生［ごしょう］”が来世のために積む功徳の方へ意味を広げていったのに対して，“後世”は，“後生を願う”などの，後生極楽往生を願う場合の用法が多く，それが転じて②のように死後の安泰そのものを意味するようになった」）が目を引く。

「来世」（『広辞苑』＝「〔仏〕［未来世の略］三世の一つ。死後の世界。未来の世。後世（ごせ）。後生（ごしょう）。らいせい」。『日国』＝「〖名〗［“せ”は“世”の呉音］仏語。三世の一つで，死後おとずれてくる世。未来世。後世［ごせ］。後生［ごしょう］。らいせい」，初出＝「続日本紀－天平宝字二年［758］」，仏典＝「仏蔵経－下」），「来生（しょう）」（「〖名〗仏語。未来の世に生まれ生きること。来たるべき生。未来の生存。後生［ごしょう］」，初出＝「私聚百因縁集［1257］」），「後（ご）/来世（せい）（＝「世（せ）」）」等と，同義の単語は実に多い。

逆の「前世（せ）」（『広辞苑』＝「〔ゼンゼとも〕㊀〖名〗〔仏〕三世の一つ。現世に生まれ出る前の生涯・時代。過去世。前の世。先の世」［出典・㊁略］）。『日国』の【前世・先世】＝「㊀〖名〗［古くは多く“ぜんぜ”］この世に生まれ出る以前の世。さきのよ。過去世［かこせ］」，初出＝「霊異記［810－824］」［㊁略］）も，異読・多義の「前世（せい）」（同＝「①→ぜんせ。②昔。いにしえ。前代」。「〖名〗1むかし。いにしえ。

前代。2⇨ぜんせ［前世］」，1の初出・漢典＝「随筆・秉燭譚［1729］」「漢書－匈奴伝・下」）が有る。

同義の「前生（しょう）」（『広辞苑』＝「前の世。ぜんせ」［『宇治拾遺物語』『日葡辞書』の出典略］。『日国』＝「〖名〗［古くは“ぜんじょう”とも］仏語。この世の中に，人間として生まれてくる以前に生をうけていた世。また，その生。前の世。前世。先生［せんじょう］。ぜんせい。↔今生［こんじょう］」，初出＝「三朝指帰［797］」）は，『広辞苑』に無い「前生（せい）」の表記も有る（『日国』＝「〖名〗［“ぜんしょう〈前生〉”に同じ］」，漢典＝「寒山－生前大愚痴詩」，用例無し）。

他方の「先生（じょう）」（『広辞苑』＝「①師匠。師と仰ぐ人。また，人の敬称。せんせい。［②略］③前生（ぜんしょう）に同じ」［①③の『太平記』『霊異記』の出典略］）は，『日国』の項（〖名〗［古くは“ぜんしょう”“ぜんじょう”とも］）の1 3（「師。せんせい」「“ぜんしょう［前生］”に同じ」）の初出（「書紀［720］」「霊異記［810－824］」）の通り成立が早い。脱宗教の「先生（せい）」の最古（「〖名〗1先に生まれた人。年長者」）も，約5世紀後に現れた（初出＝「六代勝事記［1223－24頃］」）。

「（前・現・来）三世」と「（前・今・後）三生」

『日国』の【三世（ぜ）】（「〖名〗1仏語。前世・現世・来世［後世］，または過去世・現在世・未来世の総称。過去・現在・未来の称。三際［さんさい］。三生［さんしょう］。三界［さんがい］。2［子の代までを一世，孫までを二世というのに対して］本人から曾孫への三代。曾孫にいたるまで三代にわたるのをいう。三世［さんせい］。3⇨さんせい［三世］②。4［親子の縁は一世，夫婦の縁は二世，主従の縁は三世というところから］主従の称」）は，大半が中国語と通じながら相異も有る。

1 2 4（初出＝「観智院本三宝絵［984］」「続日本紀－養老七年［723］」「車屋本謡曲・朝長［1432頃］」）は，何れも仏典・漢典が付かず和製漢語の様に印象を与えるが，一番古い2の最後（3点目）の用例（「文明本節用集［室町中］“医不二三世［サンゼ］一不レ服二其薬一〔礼記〕”」）は，『礼記・曲礼下』の「医不三世，不服其薬」（医は三世ならざれば，その薬を服せず）の漢文訓読で，❹（「佛教謂過去、現在、将来」［仏教で謂う過去・現在・将来］）にも仏経が語源として示される。

その文（「《大智度論・巻一》：“佛念過去、未来、現在三世諸佛法皆衆生為説法，我亦應爾”」）に，時間の軸の3区分の名称が述べてある。『日国』の語誌(1)（「①は梵語 traikālya などの漢訳語。原語は“過去・現在・未来”“成長・持続・廃退”などの意。仏教において，存在の生滅する過程に仮に立てられた三種の区分をいう。これを個人の生にあてたものが，出生以前［前世］・現在［現世］・命終以後［来世］の三世である」）の通り，原語は生滅・盛衰を表す哲学的な意を持ち人生論に用い得る。

(2)（「奈良朝に三世の観念が知られていたことは『万葉－三・三四八』の“今代［このよ］にし楽しくあらば来世［こむよ］には虫に鳥にもわれはなりなむ〈大伴旅人〉”の例などからうかがえる。平安中期以後に使用例が見え始め，中世から広く用いられる。しかし，“三世”単独の例は少なく，多くは“三世諸仏”“三世因果”などの形で見られる」）は，奈良朝（710～84）の萌芽（ほうが）→平安時代（794～1185）中期（901

～1093）の散発→中世（1185～1573）の普及を示すが，時期が盛唐→北宋→南宋～明と重なる。

（3）（「平安朝には三世のうち主として前世と現世の因果関係が“宿世（すくせ・しゅくせ）”の語でとらえられており，中世には浄土宗の浸透に伴って現世と来世の関係が重視され，“後生［ごしょう］”が多用された」）から，過去・現在の対と因縁から現在・未来の対と展開へ軸足が移った変遷を知る。言わば歴史認識より成就祈願を重んじる観念・情念の変化とも思えるが，両方とも現世 / 今生が基準と拠り所であった。

「前世」「後 / 来世」と対比される「現世」（『広辞苑』＝「①［古く，また仏教ではゲンゼ］現在の世。この世。現生。現在生。現在世［『落窪物語』の出典略］」。『日国』＝「〖名〗［“現在世”の略。古くは，また仏語では“げんぜ”］現在の世の中。今の世。生を受けている現実の世。特に仏教では三世の一つで，前世，来世に対して用いる。現生［げんしょう］。現。げんせい」，初出＝「観智院本三宝絵［984］」）は，仏典（「法華経－普賢菩薩勧発品」）に由来した。

「今生」（「〔仏〕この世に生きている間。この世。保元“―の思ひ出はあるまじ，後生のつとに仕れ”」。「〖名〗仏語。この世に生きていること。また，その間。この世。現世。↔後生［ごしょう］・前生［ぜんしょう］」，初出＝「権記－長徳四年［998］」，漢典＝「白居易－和楊六尚書喜両弟漢公転呉興魯士賜章服命賓開宴用慶恩栄賦長句見示詩」）は，単語群の中で珍しく仏典ならぬ漢典を示す（『漢大』［「此生。謂這一輩子」〈この一生。この生涯を謂う〉］の初出も同じ［題中引用の作品名は〈喜～栄〉で表示］）。

「今世」（同＝「〔仏〕今の世。現世。こんせい。こんぜ」。「〖名〗［“こんせ”とも］仏語。今の世。後世［ごせ］・来世［らいせ］に対し，今のこの世をさす。現世［げんせ］」，初出＝「本朝麗藻［1010か］」，仏典＝「大集経－一六」）は，「来世」「前生」に次ぎ「後生・前世」と同じの「現生」（『広辞苑』＝「現世に同じ」。『日国』＝「〖名〗［現在の生の意］“げんせ［現世］”に同じ」，初出＝「霊異記［810－824］」）より遅い。

前出の【三世】3で同義と記す【三世】②（「同じ血統や同じ流派の祖または同名の法王や皇帝のうち，三番目の者。また，三代目の者。第三代。さんぜ」）は，和製の4（「移民などの三代目の世代。“日系三世”」）と同じく出典が無い。3（「“さんぜ［三世］②”に同じ」）に用例（「皇室典範［1947］」）が付き，〖名〗1（「親から子，子から親の親・子・孫の関係にある三つの世代。三代」）には，使用歴（「文明本節用集［室町中］」等２点）と由来（「礼記－曲礼下“医不二三世一，不レ服二其薬一”」）が有る。

本項と【三世】2で同じ漢典が原語 / 訳文に作るのは「世」の漢 / 和風読みに似合うが，『漢大』の❶（「指祖孫三代」［親・子・孫の３代を指す］）の初出（「《礼記・曲礼下》：“去國三世。”」）は，同じ文献の別の語録に拠る。『広辞苑』の【三世】（「①父・子・孫の三代。②三代目。“日系―”③同名の君主などで，三番目の人。“アレクサンドル―”」）の①も同義であるが，『漢大』の「祖」（孫の祖父母），『日国』の「親」と違う「父」は家父長制の名残を感じさせる。

『漢大』の❷（「指《春秋》公羊家主張的歴史演変的三個階段，即所見世、所聞世、所傳聞世」［『春秋』公羊学派が主張した歴史の発展・変化の３つの段階，即ち所見の世・所聞の世・伝聞の世を指す］，「康

有為拠公羊家言曾提出拠乱世、昇平世、太平世之説。見《大同書》」［康有為は公羊学派の言説に拠って，拠乱世・昇平世・太平世を提起した事が有る。『大同記』に見える］）で，由来（「《公羊伝・隠公元年》：“所見異辭，所聞異辭，所傳聞異辭”」）等を経て「三世」は近代（「清銭謙益《玉剣尊聞序》）に出た。

儒教経典の四書五経（『礼記』中の「大学」「中庸」篇と『論語』『孟子』，『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』）の内の『春秋』（魯国［前11C～前256］の隠公元年～哀公14年［前722～前481］の編年体史，年月・四季順が題の由来。孔子が筆削した著と伝えられ，毀誉褒貶を含み中正で厳しい筆法で知られる。前480頃成立）は，注釈に左氏・穀梁・公羊の3伝が有り，最も有名な『左氏伝』に次ぐ『公羊伝』は学派を生み，康有為（1858～1927，思想家・春秋公羊学者）まで継承された。

『日国』の【伝聞】〖名〗1（「［―する］人から伝え聞くこと。人づてにいいつたわること。いいつたえ。噂［うわさ］に聞くこと。また，その噂」，初出＝「江談抄［1111頃］」）は，「春秋公羊伝－哀公一四年“所レ見異レ辞，所レ聞異レ辞，所二伝聞一異レ辞”」が漢典と為る。同じ文献の前出の最初の年と対を為す最終の年に出た同じ語録はこの単語だけでなく，「世＝世代。歴史時期」の発想で仏教より早い中国独特の「三世」の概念を作った。

❸（「佛家以過去、現在、未来為三世」［仏教以過去・現在・未来を三世とする］）は，初出（「北斉顔之推《顔氏家訓・帰心》」）で同じ典拠の「光陰可惜，譬諸流水」と繋がる。最後の❹（「指《黄帝針灸》、《神農本草》和《素女脈訣》三部古医書」［3種の古い医書，即ち『黄帝針灸』『神農本草』と『素女脈訣』を指す］，初出＝「清宋濂《贈医師葛某序》」）は，❶の初出に並び得る「医不三世，不服其薬」と同じ領域で言葉の連環を結ぶ。

「陰徳・陽報」と「陰間・蔭官」

『広辞苑』の【三世】（「①〔仏〕過去・現在・未来。また，前世・現世・後世［来世］。三際。今昔一“譬ひ―に恨みを結べりいふとみ”②父・子・孫の三代。③［諺に“親子は一世，夫婦は二世，主従は三世”ということから］主従の関係」）は，「三際」（「〔仏〕三世①に同じ」。『日国』＝「〖名〗1仏語。過去と現在と未来の三つの世。三世［さんぜ］。2天と地との間を三段階に分けた時の，熱際・冷際・温際をいう」，初出＝「往生要集［984－985］」「和蘭天説［1795］」）を引き合いに出す。

『日国』の【三世】の語釈中の「三界」（「〓〖名〗1仏語。いっさいの衆生の生死輪廻［しょうじりんね］する三種の迷いの世界。すなわち，欲界・色界［しきかい］・無色界をいう。2“さんぜんだいせんせかい［三千大千世界］”の略。3仏語。過去・現在・未来の三世をいう。4三つのさかい。三つの方角。［〓〖接尾〗略］」，1 4の初出＝「万葉［8C後］」「海道記［1223頃］」）は，『漢大』では仏語の詳解（色界の「四禪天，或十六天、十八天」，無色界の「“四無色天”或“四空處”」の称に言及）しか無い。

『広辞苑』（「①〔仏〕一切衆生が輪廻している三種の世界，すなわち欲界・色界・無色界。衆生が活動する全世界を指す。狂，吃り“あの男は―を家として”。“子は―の首かせ”②三世に同じ。

③［接尾辞的に］［㋐㋑略］」）は，熟語の「子は三界の首枷」（「親は子への愛情にひかされて一生苦労の絶え間が無い」，『日国』＝「親は子を思う心に引かされて，一生自由を束縛される。子はうきよのほだし」，初出＝「幸若・鎌田［室町末－近世初］」）が用例と為る処から普及度を窺わせる。

同じ【三世】の語釈中の「三生」（「〖名〗［“さんじょう”とも］仏語。前生［過去］，現生［現在］，後生［未来］の三つをいう。三世［さんぜ］」，初出＝「秘蔵宝鑰［830頃］」，漢典＝「白居易－贈張処士山人詩」。『広辞苑』＝「〔仏〕前生［過去］・現生［現在］・後生［未来］の総称」）は，「三世／世」「前世／世」「今世／世」「後世／世」「前生／生」「後生／後生」「来生／生」と違って，「先生」「現生」と同様に仏語としての異読が無い。

『現漢』には「三世」「三生」の項が無いが，【三生有幸】（「客套話，表示難得的好運気［仏教称前生、今生和来生為三世］［儀礼上の常套句，得難い好運を表す〈仏教で前生・今生と来世を三世と称す〉］）が有る。『漢大』で「極言幸運之深」（深遠な幸運を表す極言）と説明された熟語（初出＝「元王実甫《西廂記》第一本第二折」）は，仏教で前の三世で積んだ徳行に由る幸せを指し，今は多く光栄・幸運の至りの謙称に用いるが，前・今・後の三世と違う今までの「前三世」が興味深い。

「後生は徳の余り」は来世での幸福を今生の積徳の結果とするが，『広辞苑』『日国』の【積徳】（「徳行をつむこと。つもった徳行」。「〖名〗かさねた徳行。また，徳行をつむこと」，初出＝「史記抄［1477］」，漢典＝「書経－盤庚上」）と比べて，『現漢』（「㒳民間指為了求福而做好事，泛指做好事：～行善｜你可積了大徳了」［㒳民間で，幸福を求める為に好い事をする事を指す。一般に，善い行いをする事を指す。「徳を積み善行を重ねる」「貴方は大いに徳を積んだ］）は，高い目的意識・常用度を示す。

日本語の「陰徳」（『広辞苑』＝「人に知れないように施す恩徳。“―を積む”↔陽報」。『日国』＝「〖名〗人に知られない善行。ひそかに施す恩徳。隠れた功績。陰騭［いんしつ］。［2～6略］」，初出＝「本朝文粋［1060頃］」，漢典＝「史記－韓世家賛」）と違い，『現漢』の両義（「名暗中做的好事；迷信的人指在人世間所做的而在陰間可以記録功徳的好事」［名陰で行った善い事。迷信の人は，世間で行いあの世で功徳として記録され得る善行を指す］）は，「陰間」での褒美を期待する意と迷信への否定を含める。

『現漢』の【陰功】（「名陰徳」）は日本の両辞書には無く，逆に「陽報」（『広辞苑』＝「はっきりとあらわれる報い。“陰徳あれば―あり”」。『日国』＝「〖名〗はっきりとよい報いがあらわれること。また，その報い。⇨陰徳あれば陽報あり」，初出＝「慶長見聞録［1614］」，漢典＝「淮南子－人間訓」）は，漢籍由来なのに対を好む国民性に反して『現漢』には無い。『漢大』の採録（語釈＝「在人世間得到的報應」［この世で得る応報］）は，同じ出典を挙げるだけに現代の消失を浮彫にした。

参照を指示する【陰徳あれば陽報あり】（「［『淮南子－人間訓』の“夫有二陰徳一者，必有二陽報一。有二陰行一者，必有二昭名一”による］ひそかに善い事を行なえば，後日必ずよい報いを受ける」，初出＝「蒙求和歌（1204）」）は，『広辞苑』で強調表現を入れた【陰徳あれば必ず陽報あり】（「［淮南子人間訓］人知れず善行を積んだ人には，よい報いが目に見えて現れる」）と為るが，『漢大』は【陽報】の原典（「《淮南子・人間》：“夫有陰徳者，必有陽報，有陰行者，必有昭名”」）の成句項を設けていない。

『現漢』『広辞苑』に無い「陰行」は『日国』に有り（「〖名〗1人にかくれた良い行い。陰徳。2［―する］ひそかに行くこと」），漢典（「文子－上徳」）のみの1と和製語義の2（初出＝「日本風俗備考［1833］」）は両言語の異同を現す。他方,『現漢』の【陰徳】の語釈中の「陰間」（「名迷信指人死後霊魂所在的地方。也叫陰曹、陰司」［名迷信で，人の死後に魂が在る所を指す。「陰曹」「陰司」とも言う］）は，「陰曹」（「名陰間」）と共に日本語に入っていない。

同形の和語「陰間(かげま)・蔭間」は『広辞苑』では１義（「江戸時代，まだ舞台に出ない少年俳優の称。また，宴席に侍して男色を売った少年。陰舞(かげまい)。蔭子。男娼。なお“陰間”は鎌倉景政の“景政”の当て字で，片目の景政から“めかけ”の意に用いたともいい，本来は男女に通用」），『日国』では両義（「〖名〗1江戸時代，まだ舞台に出ない少年の歌舞伎俳優。また，宴席に侍って男色を売った少年。若衆［わかしゅ］。陰舞。陰郎。かげこ。かげまこ。かげうま。2江戸初期，妾［めかけ］の異称」）と為る。

成立順が逆の1 2（初出＝「仮名草子・都風俗鑑［1681］」「随筆・吉原失墜［1674］」）は，倶に前近代の事象ながら国語辞書で詳説してある。対して『現漢』の【陰司】（「名陰間」）は『日国』に残る（「〖名〗地獄。えんまの庁。また，地獄の役人」，用例＝「鑑草［1647］」中の２点，漢典＝「大宋宣和遺事－元集“詩曰，誤レ国欺レ君罪不レ軽，陰司報応自分明”」）ものの，現代に非国語と化し『広辞苑』の圏外へと切り離された。

音読みで「陰間」と同音の「蔭官」（『広辞苑』＝「父祖の功労のおかげで官途に登用されること」。『日国』＝「〖名〗昔，中国で本人の実力によってでなく，父祖の功労によって官職を与えられること。また，その官職。平安時代，日本では蔭位［おんい］と称した」，漢典＝「資治通鑑注－後漢桓帝紀上之下」，用例無し）は，『現漢』では所謂「歴史的垃圾堆」（歴史の塵溜(ごみた)め）に遺棄されたが，字形が重なり発音・声調も一緒の「陰・蔭」（yīn）は「（前）三世」と繋がる。

「鶏犬昇天(けいけん)」と「鶏犬相聞(あいきこゆ)」

「蔭位」（『日国』＝「〖名〗父祖の蔭［おん］により授けられる位階。五位以上の貴族の子，三位以上および親王，諸王の子や孫は二十一歳以上になると位階を授けられる資格を得た。奈良時代には貢挙や別勅処分などの制度が加えられたが，平安時代になると，令制よりも高位や弱年の叙位が一般化した。→蔭(おん)」，初出＝「令義解［718］」）は，日本に止(とど)まった和製漢語であるか，「蔭官」と同じ蔭(おん)に由る封建的家父長制の特権授受である。

『広辞苑』に無い【蔭(おん)】（「〖名〗律令制で，有位者が親族に及ぼすことができる諸特権の称。蔭位［おんい］や議・請・減・贖などの特権がある」，初出＝「続日本紀－大宝元年［701］」）は，『現漢』の【蔭】yìn ❸（「封建時代由於父祖有功而給予子孫入学或任官的権利」［封建時代，父祖が有する功労に由り子孫に与えられた入学或いは任官の権利］）と同源である。❷（「〈書〉蔭庇：封妻～子」［〈書〉庇護。「妻に称号を授け子に官職を継がせる」］）も，日本の擬似漢語「御蔭(おかげ)（様(さま)）」と通底する。

「蔭庇」（「〈書〉𠮷大樹枝葉遮蔽陽光，宜於人們休息，比喩尊長照顧晩輩或祖宗保祐子孫」［〈書〉𠮷大樹が枝葉で陽の光を遮り，人々の休憩の場に適する。目上の人が下の世代の面倒をし，或いは先祖が子孫を加護する事の比喩］）は，【蔭】❶（「〈口〉没有陽光；又涼又潮」［〈口〉日の光が無い。涼しくて湿っている］），『日国』の【陰・蔭・翳】の同訓異字（「かげ【陰・蔭・翳・影・景】」）中の【蔭】（「［イン］草や木のかげ。“緑蔭”転じて，おかげ。助け。また，おおう。隠す。かばう」）と同じ発想である。

【陰・蔭・翳】（「〈名〉［“かげ〈影〉”と同語源］」）の一（「光線や風雨の当たらないところ」）4（「人間関係や世間の及ぼす被害からの庇護。また，助力したり守ってくれたりする人。めぐみ。おかげ」，初出＝「古今［905－914］」）は，有力者の庇護を表す中国語「大樹底下好乗涼」（大樹の下は涼を取る絶好の場。寄らば大樹の蔭）と通じる。【御陰・御蔭】（「〈名〉［“お”は接頭語］」）の1（「神仏のたすけ。加護［かご］」，初出＝「虎明本狂言・鬼瓦［室町松－近世初］」）は，中国語の人間本位と違う。

『広辞苑』の【蔭位】（「［父祖のお蔭によって子孫に位を賜う意］律令制で，皇親，五世までの王の子，諸臣の三位以上の者の子・孫，五位以上の者の子が二一歳になると位階を授けられる制度」）に，先代・先々代の御蔭が出る。【蔭子】（「蔭位を受くべき子。親王や五位以上の人の子。［『今昔物語』の出典略］」）と【蔭孫】（「蔭位を受くべき孫」）は，古くから相継いで現れた（初出＝「令義解［718］」「令集解［800］」，前者の漢典＝「称謂録－蔭生・蔭子」）が，後者は『漢大』にも入らない。

蔭位・蔭官の範囲は主に皇親・功臣であるが，「蔭庇」と共に日本語に無い「封妻蔭子」（「君主時代功臣的妻子得到封号，子孫世襲官職」［君主制時代に，功臣の妻が称号を得，子孫が官職を世襲する］）は，子孫に限らず妻にも特典が授かる点で日本より広い。『現漢』にも有る成句の「一人得道，鶏犬昇天」（1人が道を得れば，鶏犬まで天に昇る）は，「一個人得勢，他的親戚朋友也跟着沾光」（1人が権勢を得れば，その親戚・友人も御蔭を被る）という国柄を表す。

『淮南子』を編著した淮南王劉安（前179～前122，西漢［前202～後8］の思想家・文学者）の伝説に，仙を求めて昇天した後に鶏・犬が残りの仙薬を舐めたら共に昇天したと有る。錬丹（不老不死の妙薬金丹の試作）等の仙術修錬に励んだ葛洪（283～343頃，晋の道士）は『神仙伝』で，「鶏犬舐啄之，尽得昇天」（鶏犬之を舐啄し，尽く天に昇るを得たり）と霊薬の霊験を描き，他人の権勢に頼って栄達を得る意の「淮南鶏犬」「一人得道，鶏犬昇天」が其処から生れた。

『日国』には【淮南の橘の淮北に移されて枳殻となる】（「［中国，春秋時代，斉の晏子が楚に使いしたとき，楚王が晏子を辱めようとして，ある者をしばり，斉の人間が盗みをしたと偽ったところ，晏子は“橘生二淮南一則為レ橘，生二于淮北一則為レ枳，葉徒相似，其実味不レ同，所二以然一者何，水土異也”と答え，斉で盗みをしなかった者が，楚に来て盗みをしたのは，楚の社会が盗人を生みやすい環境だからだとやりこめたという，『晏子春秋－雑下』に見える故事から］人が境遇によって変化するたとえ」）と有る。

用例（「名語記［1275］」）付きの同項は『広辞苑』にも『現漢』にも入っていないが，幅広い収録に「―の鶏犬」が無い事は『現漢』の【一人得道，鶏犬昇天】の立項と対照を成す。

【鶏犬】（「〈名〉ニワトリとイヌ。鶏狗［けいく］」，初出＝「経国集［827］」，漢典＝「孟子－告子・上」）

の成句項も，【―相聞こゆ】（「鶏と犬の鳴き声があちらこちらから聞こえて来るの意で，村里が家つづきになっているようすをいう」），【―雲に吠ゆる】（「“けだもの［獣］雲に吠ゆる”に同じ」）である。

前者は用例が無く複数の漢典を付し（「＊老子－八〇“鄰国相望，鶏犬之声相聞”＊陶潜－桃花源記“阡陌交通，鶏犬相聞”」），1点目は道教の祖を為す春秋時代（前770～前476）の思想家（生歿年不詳）の名著で，次の方は日本の国語教育に組み込まれた漢文の名作である。『広辞苑』の【鶏犬】（「鶏と犬」）の同じ成句項（「［陶淵明，桃花源記］［鶏や犬の鳴き声があちこち聞こえる意から］村里の人家が続いているさま」）も，隠棲した田園詩人への日本人の愛着を思わせる。

『現漢』には「鶏犬」の項は無く，【鶏犬不寧】（「連鶏犬都不得安寧，形容搅擾得很厲害」［鶏や犬までも安泰でいられない。騒擾が大変酷い様の形容］），【鶏犬昇天】（「見1537頁〖一人得道，鶏犬昇天〗」）が有る。前者の由来は『漢大』の初出（［夏敬渠〈1705～87〉著長篇小説］《野叟曝言・第十二回》）より千年近く早い，唐宋八大家中2位の柳宗元（773～819，中唐の文学者）の随筆『捕蛇者説』に遡れる（「嘩然而駭者，雖鶏狗不得寧焉」［嘩然として駭く者，鶏狗と雖も寧きを得ず］）。

「鶏犬不寧」（鶏犬も寧かならず）の反対語「鶏犬不驚」（鶏犬も驚かず）は，厳格な規律で粛々と行軍し鶏犬でさえ驚かされない様を表す（出典＝［明］焦竑『玉堂叢語』「行誼」）。他方の「鶏犬不留」は殺戮の凄惨さの形容で，出典（［清］呉趼人『痛史』「六回」の「常州已経被屠，常州城内鶏犬不留」［常州已経に屠を被り，常州の城内鶏犬も留めず］）に記された南宋（1127～1276）末の金軍の大虐殺は，中国の歴史に満ちた物騒・殺伐の極致で長閑な「鶏犬相聞」と対蹠に在る。

【鶏犬雲に吠える】の主項目【獣雲に吠える】（「［淮南王の劉安が，仙術を研究して仙薬を得，それを服用して昇天したが，その残った薬を入れた器を庭に放置しておいたため，鶏や犬がそれをなめて昇天し，そのために鶏が雲中に鳴き，犬が天上に吠えるようになったという『神仙伝』の伝説から］つまらない人間が非常な光栄に浴することをたとえていう。鶏犬［けいけん］雲に吠える」，初出＝「古今［905－914］」）は，「淮南鶏犬」等と同じ由来ながら獣に一般化し比喩の意も中国の成句と異なる。

附　記

本稿連載1（本誌33巻3号［2021年2月刊］59～90頁）の部分で，締切りの都合で凡例・依拠等の記載が出来ず，此処に併せて補完する。

（一）諸辞書の出典提示に関する所見

本稿は『広辞苑』『日本国語大辞典』と『現代漢語詞典』『漢語大辞典』を両言語比較の主要な材料とし，引用は特に断りが無い限り連載開始時の現行版に拠る。『日国』『漢大』は後に簡略・微修正を施した少巻数の精選版も出たが，全面改訂・増補ではなく母体や他辞書との整合性に欠ける為，出典

等の不備を改める追加・差し替え等の例示を除いて原則的には取り上げない。

『漢大』第1版と『日国』第2版は刊行完結から其々26年・18年経ち，その後の社会の変化や研究の進展を踏まえて論(あげつら)う事は些(いささ)か酷かも知れないが，両国の最大規模・最高水準の国語辞典の進化を期待する切望から，新版の編者に由る両書の相互参照を促したい。

『日国』第2版は四半世紀前の初版への改善として用例の年代を明記し，『漢大』を遥かに上回る緻密さを現したが，古代～近代の出典が豊富な『漢大』を利用せず漢籍典拠の欠落が散見される点は惜しまれる。多くの漢単語は必ずしも中国語の影響を直接に受けた所産ではなかろうが，先に生れた中国語を示さず和製漢語/語義とするのは，両言語の通底・相関に対する認識の深化には不利である。

連載1・2の本文では一部の漢典（両言語に無い造語，漢籍典拠の略）を指摘したが，論述の都合に由り割愛した数点を言及順で掲げて置く。

(1)【匪徒】は「地方官会議日誌－四･明治八年（1875）六月二三日」等2点の用例のみであるが,『漢大』の4義中の日本語と類義の「❸強盗」は「唐司空図《復安南碑》」等2点の出典が付く。

(2)【土匪】は「東京日日新聞－明治二九年（1896）七月七日」等2点の用例のみであるが,『漢大』には「太平天国《天情道理書》」等3点の出典が有る。

(3)【幇助・幫助】の中国語と同義の1は「小説字彙（1784）」等4点の和文用例のみであるが，『漢大』の【幫助】には「宋宗沢《乞回鑾疏》」等3点の出典が示される。

(4)【叛徒･反徒】は「仏和法律字彙（1886）〈藤林忠良･加太邦憲〉」等2点の用例のみであるが,『漢大』の2義中の日本語と類義の「❶泛指有背叛行為的人」は「唐李徳裕《武宗改名告天地文》」等3点の出典が付される。

(5)【背反･悖反】の1 2は「花柳春話（1878－79）〈織田純一郎訳〉」,「西国立志編（1870－71）〈中村正直訳〉」等2点の用例が付くが,『漢大』の【背反】（「背叛, 反叛」）には「《水滸伝》第三三回」「又第一二〇回」の出典が有る（和製漢語「悖反」は未収録）。

(6)【蠢動】1「虫がうごめくこと。また，物がむくむくと動くこと。特に“蠢動含霊”の形で，生きとし生けるものすべての意でも用いる」は,「年中行事秘抄（12C末）」等3点の用例に仏典「十善法語（1775）」を添えたが,『漢大』の5義中の❷「蠕蠕而動」に「晋傅玄《陽春賦》」等3点の出典が有り，又『日国』に無い【蠢動含霊】の項も設けられ,「宋洪邁《容斎続筆・蜘蛛結網》」等4点の出典が引いてある。

(7)【寛広】は「寛永刊本蒙求抄（1529頃）」等3点の用例のみであるが，『漢大』の3義中❷「面積大，寛濶」に《敦煌変文集・降魔変文》等3点の出典が有る。

(8)【寛宏】は「青春（1905－06）〈小栗風葉〉」等3点の用例のみであるが,『漢大』の同項（「亦作“寛弘”、“寛洪”」）の❶「胸懐寛濶，気量弘深，能容人」に《逸周書・宝典》等5点,「亦謂慷慨大方，不吝嗇」に「老舎《二馬》」，❷「寛濶」に「明徐弘祖《徐霞客游記・粤西游記四》」等2点の出典が引かれる。

（9）【広大・宏大】は「広大」に作る「今昔（1120頃か）」等5点，「宏大」に作る「経国美談（1883－84）〈矢野龍渓〉」等2点の用例が有るが，未記載の漢典は『漢大』の【広大】の9義中❶「指面積、空間寛広、寛濶」に《礼記・曲礼上》等5点，【宏大】の3義中❷「巨大；宏偉」に「宋蘇軾《上神宗皇帝書》」等4点，「亦指広大的範囲」に「明呉承恩《擬揀采捕水鳥表》」の出典が付く。

（10）【宏偉】は「西洋聞見録（1869－71）〈村田文夫〉」等3点の用例のみであるが，『漢大』には「宋蘇軾《応制挙上両制書》」等3点の出典が有る。

（11）【広濶・宏濶】は漢籍の「孔平仲－曹亭独登詩“江湖水方漲，曠濶吾所レ愛”」を引く一方，「地方官会議日誌－七・明治八年（1875）六月二八日」等4点中の「広濶」も，最後の用例「土（1910）〈長塚節〉」で作る「宏濶」も，同形又は同音の中国語（「曠」「広」「宏」は別々のkuàng，guǎng，hóng）の出典が無い。『漢大』の【広濶】の2義中❶「広大寛濶」に「《雲笈七籤》巻五」等3点，【宏濶】の「宏偉遼濶」に「宋蘇轍《礼論》」等2点，「又為寛濶」に「明徐弘祖《徐霞客游記・黔游記一》」等2点の出典が有る。

（12）【狂瀾】の「1荒れ狂う波。狂ったようにさかまく大波。狂濤（きょうとう）」に，「東海一漚集（1375頃）」等4点の用例，「2物事の狂い乱れる状態をたとえていう語」に，「内地雑居未来之夢（1886）〈坪内逍遥〉」等3点の用例と漢典「丁復－送客詩」が有るが，『漢大』の「❶汹涌的波浪」に「唐韓愈《進学解》」等3点の出典，❷の「喩劇烈的社会変動或大的動乱」に「清方文《蕪湖訪宋玉叔計部感旧》詩之三」等3点の出典，「亦指紛繁的思潮」に「葉聖陶《窮愁》」の出典が付く。

ついでに触れたい気懸（がか）りの点は，『日国』の【安心】の漢籍出典「史記－項羽本紀」「書経－畢命」の逆の年代順である。

同時に指摘しなければ為らない『漢大』の規格外・異次元の粗忽の1例として，【力挽狂瀾】の出典は「語本唐韓愈《進学解》」の次に当代の「柯岩《嵐山情思》」等2点が出て，南宋の王惲の「筆端力挽狂瀾倒」等の典拠は素通りされた。『日国』の【狂瀾】1は漢籍を提示していないが，【狂瀾を既倒に廻らす / 反す】の説明で韓愈の「廻二狂瀾於既倒一」を由来とし，「常山文集（1718）」～「吾輩は猫である（1905－06）〈夏目漱石〉」等4点の用例を丹念に拾い上げている。

（二）諸辞書の凡例・引用に関する説明

和文辞書の見出し語の引用は簡明を期して，『広辞苑』の「あんじん【安心】」を【安心（じん）】と記し，『日国』の「きょう－らん【狂瀾】」を【狂瀾】にし，成句項【きょうらん を 既倒（きとう）に＝廻（めぐ）らす［＝反〈かえ〉す］】を元の儘で掲げる一方，【狂瀾を既倒に廻らす / 反す】の形も併用する。

親見出しに従属する形で配置された小見出し（複合語・成句・諺）の複数列挙は効率性を求め，『広辞苑』の「ご・しょう【後生】」項内の【後生一生】【後生気】【後生嫌い】【後生心】【後生善処】【後生大事】【後生立て】【後生頼み】【後生願い】【後生始め】【後生菩提】【後生楽】【後生願いの六性悪】【後生は徳の余り】を，【後生】の【──一生 / 気 / 嫌い / 心 / 善処 / 大事 / 立て / 頼み / 願い / 始め / 菩提 / 楽 /

願いの六性悪 / は徳の余り】と合併した。

複数項目の並列も相関を示す為に，『日国』の【身心・身神】【心身・神身】→【身心・身神 / 心身・神身】の様な並列をした。

和文用例の表示は全文掲載の場合を除いて，作品・年代・著者名のみとし，章節題・日付等は略す。

原文の〈略〉と区別する様に，本稿筆者に由る省略は（前略）（中略）（後略）と記す。

括弧付きの引用で（）の内の（）は［］とし，［］の内の（）は〈〉とし，「」の内の「」は“ ”とし，“ ”の内の会話等を表す日本語の『』は‘ ’とする（両言語共通の書名符号と混同しない為）。

中国の辞書の引用は原則的に日本語の漢字を用い，簡体・異体併記の見出し語は一部原語を掲げる。

『現漢』の〈方〉〈書〉〈口〉形（方言 / 文章語 / 口語 / 形容詞）等，『日国』の〖名〗（形動）（名詞 / 形容動詞）等は，自明につき文中で一部だけ説明した。

『現漢』の【反叛】fǎnpàn の次の同形・異声調（fǎn・pan）の様に，軽声（無声調）を含む単語の発音表記は・の後に置く。

『現漢』の①見出し語中の親字に付く儿，②発音表記と語釈の間の（～儿），③語釈中の～儿は，口語で必ず（①）或いは一般的に「児化」（一部の方言で特に意味の無い接尾辞「児」を付ける音声現象）と為る事を指す。

『現漢』の用例の前の◇は比喩的な用法を表す。

『漢大』の出典引用の下線は時代・人名・地名等を示す。

（三）参考文献・古典詩文の和訳の依拠

文献引用は文中に基本情報を明記した分の他に，司馬遼太郎『街道をゆく 二十五　中国・閩のみち』（朝日新聞社，1985）［関連して，前号の連載 1 の内 59 頁 8～9 行目の「文章の国」は「文字の国」に訂正する］，劉再復・林崗著『伝統与中国人――関於「五四」新文化運動若干基本主題的再反省与再批評』（三聯書店，1988）が有る。

『唐詩三百首』（蘅塘退士編）所収作品の和訳は，目加田誠訳注（全 3 巻，平凡社，1973～75）に基づき，表記等を一部変えた処が有る。

毛沢東の詩・詞の和訳は，竹内實訳（武田泰淳と共著『毛沢東　その詩と人生』，文藝春秋新社，1965）に基づき，表記等を一部変えた処が有る。

『論語』語録の和訳は，金谷治訳注（岩波書店，1963）に基づき，表記等を一部変えた処が有る。

（夏　剛，立命館大学国際関係学部教授）

相通与偏离——语文词典所见日中之异同（2）

连载第 2 回继续分析日、中权威中、大型语文词典对部分词语的解释、举例、出典提示，以此探求两种语言之间形态、意义的异同，及古往今来的相通和偏离，并指出语言所表现出和暗含着的两国世相、时代精神、国民性等的特征。

首先从“汹涌”和“狂乱”的字形引出“凶猛”、“勇猛”和“狂舞”、“乱舞”，印证汉语和日语往往不具备或疏远对方的词语。就“廻狂澜于既倒”和“力挽狂澜”，指出日语较多保留古代汉语的风貌,而与近、现代汉语的演变保持距离。日语接受“光阴似箭”而未引进“日月如梭”，活用“光阴者百代之过客”、造语“寸阴尺璧”而不用“寸金难买寸光阴”，借用“少壮几时兮”而无“少壮不努力，老大徒伤悲”，处处显示与汉语犹如大路朝天、各走半边。

再通过“不惜／可惜身命”、“安身／安心立命”、“安神、安堵”、“放心、安生”、“身心、心身”、“信心、信神”的差异，及“三生、三世”观念的强弱，加上日、汉语中“阴德阳报”、“阴间、荫官”、“鸡犬升天、鸡犬相闻”的常用度对比，加深认识在中国较多见的独善其身、己身中心、现世至上等倾向。

（夏　刚，立命馆大学国际关系学院教授）